ようこそ山口大学へ

学問の喜び

―「ふるさと」の多層拡張―

廣中　平祐
山口大学長

この度、新しく入学して来られる諸君、あなた達には大きな未来の可能性が待っている。未来の可能性を信じるか信じないかは、私の考えでは、若い諸君にとっては最重要の課題です。それは貴君自身の課題です。貴方の父や母の課題ではない。貴方の先生、今まで指導を受けた教師、これから指導を受ける教師の課題でもない。貴方が最も信頼している友人の、あるいは最も愛している人の課題でもない。貴方自身の、貴方だけの、貴方のための課題なのです。あなたが、地味な一生を生きる道を選ぼうと、アップもダウンも有るダイナミックな人生を選ぼうと、貴方が記憶力は抜群の人間であろうと、記憶力には自信のない人間であろうと、大胆で活動的で積極的な性格の持ち主であろうと、臆病で慎重過ぎると言われる性格であろうと、そんな程度の些末の問題ではない。「未来の可能性を信じるか信じないか」の問題は人生の最も根本的な問題であり、貴方の決断でどちらにも選択出来る課題であり、貴方自身にしか選択出来ない課題です。持って生まれた性格の違い、今日までの生活環境の違い、尊敬する先輩がどう思っているか、信頼する父母や敬愛する友人がどう考えているか、などは、貴方の人生にとって重要でないと言っているのではない。ただ一つだけ、「未来の可能性を信じるか信じないか」は貴方自身の課題です。

まだまだ若い貴方にとって一番大切な事はただ一つです。あなたが貴方自身の「未来の可能性」を信じることです。信じるか信じないかの違いによって、貴方の人生の将来の明暗が決まると言うことを知って下さい。もし恥ずかしければ、親にも、友人にも、他人の誰にも言わなくて良い。密かに信じているだけで良い。信じていないような素振りをしていても良い。自分だけの自分なりの自分自身のための「未来の可能性」を信じ続けていれば、何時かは、何年先か、何十年先か判らないけど、あなたの未来に、貴方自身がびっくり仰天するほどの素晴らしい局面がやってくる。自分でも不思議なくらい明るい季節がやって来る。ちょうど寒い冬の後には必ず華やぐ春がやって来るようにやって来る。そのことを私は自分自身の過去70年の経験から、若い皆さんの前で、確信をもって断言して憚りません。

私が小さい頃、瀬戸内のは波止場に一人で座っていて、波が打ち寄せ崩れる音にじっと耳を傾けていることが何度もありました。波が岸辺に向かって走り、バサバサと崩れた余波が砂浜を駆け進み、さっと引いて消えて行く。打ち寄せて来る波頭が形を変えながら盛上がって崩れ飛沫いて散る。一見すると何の変哲も無い繰り返し、この際限のない繰り返しも注意深く観察すると毎回違う。あるとき、大学生の叔父さんが私の隣に座って、ニュートンの言葉だと言って教えてくれたことがある。それは大体は次のような意味だったように思う。「深くて暗い海の底に潜り、手探りで真珠貝らしきものを探し当てる。持ち帰った貝を開いて、取り出した真珠が日光を受けて輝くのを見る」、これが学問の研究の歓びなのだ。

私が生まれ古里、中学や高校を卒業するまで私を育ててくれた山口県の片田舎、当時は人口3000くらいの半農半漁の村だった。当時の日本国は、日露戦争、満州事変、支那事変、第二次世界大戦と、次々と巨大化する戦争に自ら突入し、巨大な国土の中国での混戦、巨大な戦力の米国との正面衝突、そして国家的野望の限界を思い知らされて敗戦を迎えた。私の兄も、長男はニュウギニアで23歳の戦死、次男は北京で22歳の戦病死だった。しかし、若い私達にとって過去は過去、一番大切な関心事は未来でした。敗戦による屈辱と貧困のなかで、若い私達には新しい大きな希望が目前に存ったのだ。それは、全国の津々浦々に誕生した国立大学だった。昔からの七つの国立大学に加えて、一挙に七十幾つの新しい国立大学が誕生したのだ。昔の田舎の中高生は、特別に裕福な家庭

の子息だけが大都市の大学に進学する夢をもてたようだった。私たちの新制度になって、中学生や高校生の間で大学進学が急に大きな話題となった。敗戦日本の混乱の中で、若者のモチベーションレベルは急増した。田舎の子供にとっては正に歴史的ジャンプだったように思い出せます。

私が最初に受験したのは、郷里に一番近い広島大学でした。その受験は完全な失敗でした。自信があった数学でも、そのとき解答を出せなかった問題を今でも思い出せます。その翌年は、広島大学と京都大学の二校を受験しました。当時は入試の時期が大学によって違ったのです。そして私は、広島大学は不合格、京都大学は合格だったのです。そのとき、受験には運もあることを知りました。入学して育英会の奨学金を申請した時、面接した教官から「入試の成績はあまり芳しくないな」と言われましたが、私は「田舎から出て来た人間ですから、将来性には自信があります」と一生懸命に主張して笑われたのを覚えています。

大学に入って、しばらくは猛勉強しました。大都市出身の連中はどいつも知識は豊富で頭の回転までも速いように思えたからです。敷っぱなしの布団の上に机を作って、目が覚めると直ちに机に向かう、夜は勉強に疲れるとそのままで床に就けるように工夫しました。当時、物理学や化学を中心に勉強していたのですが、次第に自分には数学が向いていると気付き始めていました。どんな課題であれ、一定期間だけでも、集中的に勉強することの良い効果は、その努力の過程で自分の知的嗜好性と言ったものを発見できることです。物理を勉強していても、その中の数学が面白い、私の好みだと気付きました。大学二年生の中頃には、都会出身の連中に対するコンプレックスも消え、スキー部に入って、遠方のスキー場へ練習に出たり、飲み友達も出来て遊ぶことも覚えました。街や周辺の名所、旧跡を訪ねて、私の大学生時代は第二の「ふるさと」作りの期間でもありました。

大学を卒業すると意外なチャンスを得て米国に留学し、米国で教職を得て、米国で結婚し子供を育てました。ボストン周辺の大学で実質でも20年以上教授職を勤めました。特に、ハーバード大学とＭＩＴがあって、専門外の知人も多いケンブリッジ（マサチューセッツ）周辺は、私や私の家族にとって、まぎれもない第３の「ふるさと」です。

その間、ヨーロッパへは何遍も出かけて研究集会での発表や大学での集中講義を行いました。フランス、イタリー、スペインなどにも教え子が増えて行くのは楽しいものでした。特に、フランスは私の子供の家族も住んでいて、もう一つの「ふるさと」ともいえます。

学問することの大きな喜びの一つは自分の「ふるさと」が何層にも重なって拡大して行くことです。「ふるさと」が拡大すれば、不思議にも、それだけ回帰の感慨も大きいことを知りました。日本への回帰を決心したときも、東大の話を断わって京都を選びました。そして、さらには「ふるさと」の原点である山口県に回帰して６年目を向かえています。

人間には未来の可能性を予め知る能力はない。しかし、今の私が確実性をもって言えることは、「未来の可能性」は若い貴方達のものであり、貴方達が造るものであり、貴方達のためのものであると言うことです。

（平成14年３月20日）

テーマパーク としての大学

川﨑　　勝
助教授
医学部
医学教育センター副センター長

新入生の皆さん、既に繰り返し接した言葉だとは思いますが、改めて、「ご入学おめでとうございます」。そして、「山口大学にようこそ！」。

もう20年ほど前のことになりますが、大学への進学率が急激に上昇した結果（現在はさらに上昇していますが）「あまり勉強しない（少なくとも外部からはそのように見える）大学生」という新種の生物が日本に大量出現したことを受けて、「大学がレジャーランド化してしまった」という詠嘆の声が世にあふれたことがありました。これは、明治以来の「常識」であった「大学＝最高学府（←既に死語でしょうか？）」という構図を前提にして、その構図にあわない新種の学生群に対して「識者」と呼ばれる人たちが悲憤慷慨して生じた現象です。

これは、何を隠そう、私が大学に入学した頃の話です。しかし、自己弁護するわけではありませんが、社会状況の根本的変化をきちんと考慮するならば、大学を刻苦勉励型の狭い意味での「学問の府」としてだけ捉えるのも視野狭窄のように感じます。むしろ、大学を積極的に「テーマパーク的存在」として捉え、それを徹底的に活用する方策を考えた方

が前向きではないでしょうか。

人工的な空間

「テーマパーク」が成立するために必要不可欠の前提は、ある特定の目的のために（その目的はテーマパークによって異なりますが）通常の日常生活を送る場とは異質の極めて人工的な空間が構築されていることです。大学は社会において多様で重要な役割を果たしていますが、その役割故に、一般の実社会とはやや異なった規範やルールで動くことが許容されています。また、学生さんも一般の社会人と比べたら、「学生だから」という形で大幅に義務や責任を軽減されています。これらは大学が人工性の強い空間であることの証拠ですし、ある意味「特権を認められている」と言ってもいいのだと思います。

残念ながら大学も近年急速に「世知辛く」なってきていますし、また、皆さんの在学中にも次々と大きな変貌を遂げていくことになると思います。しかし、それでも、ここに一般の社会とは異なる人工的な空間が存在していることはまぎれもない事実です。

有限の時間

そして、テーマパークのもうひとつの大きな特徴は、そこにいることが許容される時間が極めて限られていることです。入学したばかりの皆さんに、「大学にいる時間は極めて限られている」と言ってもあまり実感は湧かないかもしれませんが、テーマパークで閉園のお知らせが流れたら自宅への帰途につかなければならないように、皆さんは４年ないし６年間が過ぎたら一人の社会人として、外部の社会に出ていかなければなりません。そして、人生全体の中で捉えるならば４年ないし６年間というのは本当にあっという間です。

ただし、本物のテーマパークの楽しみ方を思い浮かべてもらえればお分かりの通り、時間が限られていることは、その場を楽しむ上で決してマイナスの要素ではありません。むしろ、時間が限られているからこそ、その場を徹底的に楽しむことができるのだと思います（逆に一年365日朝から晩までテーマパークで過ごさなければならなくなったら、それは拷問でしょう）。

人と人のネットワーク

それでは、「大学というテーマパーク」をどのように活用し、楽しんでいけばよいのでしょうか？皆さんは「パスポート型チケット」を手にして、入場したばかりの段階です。入場した大学は、巨大で、複雑で、多岐にわたる存在です。ひょっとしたら大学自体が迷路のように感じられるかもしれません。けれども、いつまでもうろうろと迷っていたらせっかくの限られた時間をいたずらに浪費してしまいます。そこで、一番大切なのは、人と人のネットワークを早急に作り上げることです。実際、ほんの少しだけその気になれば、教室はもちろんのこと、クラブ・サークル・バイト先等々を通じて友人・知人・先輩（あるいは来年以降は後輩）など様々な人間関係を大学で構築できます（もちろん、関係を切り結ぶ相手を大学関係者に限定する必要はまったくありませんが）。学生生活を送る上で必須の諸々の「マル秘情報」をやり取りすること以外に、大学というテーマパークの時空間を共有するパートナーとしてこれらの人々はとても重要です。それに、どんなに名物のアトラクションでも、たった一人で順番待ちの行列に並んでいたらつまらないことこのうえありませんしね。

教員を使いこなそう！

もっとも、この点は、どんなガイドブックや攻略本にでも記されているような当たり前以前のレベルのことです。そこで、最後に「裏ガイド」に相当するアドバイスをひとつ。それは大学教員の活用です。もしかしたら、皆さんにとって大学の教員は高校までの先生とは異なり、随分と敷居の高い人種に感じられかもしれません。でも、それは単なる勘違いです。大学の教員は、本来であれば人生において通過地点であるべき大学になぜか居着いてしまった珍種（それもいささかくたびれた存在）に他なりません。古狸なみの大学に関するノウハウは有していますし、「使ってナンボ」の存在です。大学というテーマパークの主役は学生の皆さんです。山口大学での学生生活を充実するためにぜひ教員を使いこなしていきましょう。

☎＆FAX　(0836)22-3747
e-mail：
kawasaki@yamaguchi-u.ac.jp

若き学徒へ

木曾　康郎
教授
農学部獣医学科
家畜解剖学講座

これから大学の門をくぐる若き学徒達に意見を述べるほどの経験も実績も持ち合わせておりませんが、新入生が本学でのキャンパスライフを有意義なものにできるよう、アドバイスを依頼されましたので、日頃考えていることを書きたいと思います。参考になることがあれば幸甚です。

セレンディピティ（Serendipity）
―失敗は成功の母―

セレンディピティとは、辞書によれば「掘り出し上手」、「偶然の発見」とか訳されていますが、実験中にまったく予期していなかった現象に遭遇して、素晴らしい発見に導かれた場合を指しています。元々は、“The Three Princes of Serendip”（セイロンの三人の王子）と言う物語の中の、三人の王子が旅行中に色々予想しなかった出来事にあって、思いがけない経験を積み、多くの収穫を得たという故事にちなんだものです。セレンディピティとして最もよく引用される例は、フレミングのペニシリン発見です。彼が化膿菌の分離培養をしていた時、たまたま混入した青かびが化膿菌の発育を阻止していることに気付いたことがペニシリン発見の発端です。彼の実験計画から言えば、青かびの混入は実験の失敗であったわけですが、彼の鋭い観察眼と好奇心により世紀の大発見となったわけです。従って、私はセレンディピティを「失敗は成功の母」と意訳して使っています。天才による独創的な発見もあるとは思いますが、往々にして誰もが見ていたにもかかわらず気付かなかった小さな現象を見逃さないことが重要です。これから大学で多くの知識を学ぶことになりますが、先入観や教科書的知識に固執することなく、環境、自然、他の人から素直に学ぼうという謙虚な姿勢と柔軟な思考こそ学生時代に身に付けたいものです。「偶然」は心の準備のできていない人を助けないのですから。

若気のいたり

若気のいたり、あるいは青年の客気などと書くと誤解を招くかもしれません。言いたいことは、若さそのものが持つ強大なエネルギーを自覚し、小さくまとまるな、ということです。セレンディピティは内的エネルギーの強弱に依存するとも言えます。頭の回転が速く理解も早い人が必ずしも独創的な仕事をしたのではなく、理解は遅いが一度納得すると自明とされていた事柄を越える発見をすることは少なくないし、若気のいたりで無学なるが故に口出ししてまぐれ大当たりすることもあります。私は皆さんにそうするようにすすめたいと思います（実は私もそうすすめられてきた）。既成のパターンに関わりを持たず、勇気を持って枠を離れ、大きな輪を描き、怪我を恐れないエネルギーこそ大事にして下さい。皆さんはこの圧倒的エネルギーを持っているのですから。

桜梅桃李（おうばいとうり）

桜はサクラ、梅はウメ、桃はモモ、李はスモモ、というわけで、森羅万象すべて固有の顔と性格を持ち合わせており、何一つ同じものはありません。一卵性双生児だって、クローンだって決して同じ個ではありません。それが個性というものです。皆さんはこれから色々な個性と出会い、触れ合いながら日々を過ごすわけですが、刺激を与えてくれる出会いは直接自身と関連する分野よりも次元を異にした分野の場合が多いでしょう。むしろ、単一な思考を避けるためにも次元を異にした個性こそ積極的に大事にしていただきたい。一人が見る世界は所詮限られていますが、複数の、しかも角度が違えば違うほど、世界は広く正確に見えてきます。これをブレークスルーと言います。皆さん一人一人の個の確立とともに、多様な個性と触れ合い、彼等との討論を大切にして下さい。時には激しいディベートになるでしょう、そのことが貴重なのです。自身の可能性は多種多様な刺激によってこそ開発されるのですから。

上記を読み返してみますと、常日頃私自身に言い聞かせていることばかりでした。なにがしか「思い」を汲み取っていただけることを祈って稿を終えます。

☎　(083)933-5881
E-mail：
ykiso@agr.yamaguchi-u.ac.jp

大学生になって
―人間回復のすすめ―

溝田　忠人
教授
工学部機能材料工学科
附属図書館工学部分館長

ストレスを生むメカニズムを理解すれば、自分を分析し、それに立ち向かう方法が見つかると思います。これは、昨年行った「キャリアデザイン」の講義の要約です。

1．人間

生物として35億年、チンパンジーと別れて500万年、人はDNAを「一度も失うことなく」発展させ人類の繁栄に貢献するものを喜びと感じるようになりました。5000年前の鹿を射止めた喜びは、今では眉をひそめさせるように、喜びも長い間には変化します。釣竿から手への「あたり」の感触の深い記憶が若者を魅了するバス釣り人気の源ですが、昔の人は「リリース」はせずに空腹を満たしました。スタートライン、合唱で「ハモッタ」、ドキドキ・ハラハラ、これらは食物が採れる、協力の成果、闘争心など、「生存にプラス」を喜ぶ形質の証拠です。形質をDNAに刻むには、少なくとも数千年の歳月が要り、歴史の変化に間に合わない、人類は大脳を用い学習・教育によって継承し、DNAを補うのです。

2．成　長

より新しくDNAに刻まれた形質は、生後の成長過程で現れます。人の環境は、DNAに刻まれた当時とは異なり、例えば、数百万年来、赤ん坊は母親にしがみついて育ち、今も握力で自分を支えられるのに、その能力を使う必要が無い、これがストレスになる。同様なことは会話、歩行、記憶、論理構成能力など成長に伴って次々に現れます。個人差はあるが、人らしく育つ（DNAによる能力の開花）には、成長過程で似た手続きが要る、それが欠けるとストレスを引きずります。

3．喜びホルモン

脳が作る「喜び物質」の分泌で喜びを感じます。「味もそっけもない」が、エンドルフィン、アドレナリンなどのホルモンにより、基本的には感情が決まる。マインドコントロール、ゲーム機依存（闘争・競争）、ロックに陶酔（音刺激）など異常にのめり込むのは、強い刺激の継続による脳内麻薬への過度の依存です。たばこ、酒なども脳内麻薬の代替物質で、人はそれらを無意識に求めます。一方、依存は執着し頑張る大切な能力でもあり、社会を維持する人類には過度の依存を防ぐ制御機構があります。それが、学問、芸術など文化です。「キレル」のは、文化以前の動物への先祖帰りです。大学生には、これからも種々のストレス：成績、留年、就職…、があり、DNAは恋の悩みまで持ち込む、しかし、この豊かな感情こそ35億年かけて獲得した人類の財産です。

4．脳を鍛える

脳細胞は基本的には増殖せず、普通１日に10万個、二日酔いでは1000万も死滅する。でも長寿なのは、数に余裕があるからです。通常、人は脳細胞の３～４％しか使わない。筋肉は鍛えれば限度の80％程度の力は出せるのと比べると、無駄な使い方です。勉強すると神経回路が細胞同士をつなぎ「脳コンピュータ」の性能が向上します。勉強に疲れると、止めて逃げ出したくなる。この時、休息は必要ですが、直ぐ止めては、運動能力と同様に思考能力も向上しない。「少しは頑張る」のがコツ。努力に比例して発達します。「親の遺伝」は言い訳です。大学で頑張った人は就職しても頑張れると評価され、逆も真です。「今しか遊べない」と勝手に解釈してサボルのは、ストレスからの回避行動で、あまり逃げると、「分数の計算も出来ない大学生」になります。運動能力と同様に脳も使わないと、１週間でかなり退化します。大学生としては回避衝動に耐えて「講義に出席しその時間を有効に使う」ことが基本中の基本です。脳のためにも栄養と睡眠は大変重要、軽視しないこと。

5．記憶型から論理型へ

受験勉強は「取り敢えず記憶」だった？でも、今からは、論理型の勉強です。「何処まで分かったか」を考える。「わからない事を見つける」と言い換えても良い。思春期に理屈をこねる（論理的思考を鍛える）というDNAの要請に蓋をされたストレスを開放するのです。今は推理小説を途中で読むのを止められたモヤモヤしたストレス状態に似ています。記憶も無駄ではない、論理構成の資源として記憶内容は大切です。最初は苦痛ですが、強いて理屈を考えていれば、推理小説のように興味が湧き、DNAの用意した喜び回路にスイッチが入ります。記憶型の勉強は孤独ですが、論理型の勉強は討論相手がいると効果倍増です。友達

と大いに討論出来るようになってください。

これは何でしょう。

宇部の海岸の松林で年末に拾った松ボックリから取り出した、羽のついた松の種を、水を浸した脱脂綿をびんに入れ、その上に置いて一ヶ月くらい経ったら出てきた若芽です。７－８本の松の葉が種の殻を脱ぎ捨てる寸前です。自然はDNAも予期しなかった面白い格好を作ります。

有意義な キャンパスライフを！

内藤　博夫
教授
理学部学務委員
理学部数理科学科

新入生の皆さん、御入学おめでとうございます。入学式も終え山口大学での新たな出発を迎えた皆さんは、それぞれの希望を胸に抱き、決意を新たにしていることと思います。これからキャンパスライフをおくる皆さんへ、理学部の教官として期待していることを述べたいと思います。

１．目的を持って勉強しよう。

入学後先ず皆さんが当惑することは、自分の履修すべき科目を自分で決めて申告しなければならない事だと思います。高等学校では、いくつかの科目を選択するということを除けば、基本的には決められたカリキュラムに従って学習していれば良かったことと思います。しかし、大学のカリキュラムでは、高校時代とは比べものに成らないほど多くの授業科目が準備されています。皆さんはその中から、自分の入学した学部の要求する必修科目が何であるかを理解すると同時に、多くの選択科目の中から自分の目的に従って授業科目を選ばなければなりません。すなわち、自分の授業計画は自分で立てなければなりません。この作業が皆さんの自立の第一歩になります。そのような時、大切なことは、入学した目的をしっかり持ってガイダンスに臨むことです。ガイダンスでは授業計画の立て方の説明はしてくれますが、最後は自分の責任で決めなければなりません。周りに流される事無く、目的を持った授業計画を立てましょう。

２．課外活動にも参加しよう。

山口大学の中では、様々なサークルが課外活動を行っています。大学公認の運動クラブ・文化サークルから少人数のグループ活動など、またその目的も様々です。学生達によって自主的に運営されています。これらの課外活動に参加したり、また新たにグループを結成して１つのテーマについて考えることも良いでしょう。課外活動は皆さんの教養の幅を広げてくれます。サークルの目的をよく理解して積極的に参加しましょう。

３．友達を沢山つくろう。

キャンパスライフを有意義なものにするためには、沢山の友達をつくることも大切です。
山口大学の学生は、様々な地域や環境から集まってきます。自分と異なる地域や環境で育った人と話をすることは、自分では思いつかないような新しい発見につながります。また、友達の意見を素直に受け入れることによって、今まで自分が抱えていた悩みなども案外簡単に解決することがあります。友達との交流は、ある意味で異文化との交流です。節度を持っておおいに異文化交流をしましょう。

４．研究室を覗いてみよう。

大学は教育機関であると同時に、研究機関でもあります。入学したば

かりの皆さんには、大学でどのような研究が行われているか見当もつかないことと思います。しかし、皆さんの将来の目標を実現させるためには早くからそのことを知っておいたほうが良い場合もあります。自分の履修する授業の担当教官や所属学部の教官の研究室をちょっと覗いて見るのも参考になるものです。オフィースアワーを利用して質問等で研究室を訪れる時、教官に研究の話を聞くのも夢が膨らんで楽しいと思います。理学部教官は皆さんの来室を待っています。

☎ 083-933-5656
E-mail：
naitoh@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

キャンパスは自分で作る地図だ

上野　修
教授
人文学部
人間学講座

山大キャンパスにようこそ。ところで、「キャンパス」って、何でしょう。思うに、キャンパスは、ひとりひとりがこれから身をもって作っていく実物大の地図のようなものではないでしょうか。まだだれも書き込んでいないまっさらの自分の地図を、自分の身体で動いて作っていく。キャンパスはだから、一つっきりではありません。同じ場所でも、皆さんが作っていく地図が違うぶん、それだけ違うキャンパスがある。

【動いてみよう】

眼をさます。起きてからどこをどう移動し、キャンパスの中のどこに向かい、どこにとどまり、どこを通って帰ってくるか。とにかく自分で動いてみないとわかりません。廊下のポスターやあちこちの掲示板をチェックする。実験室や教室がある。学部棟には研究室が並ぶ。食堂、生協、図書館をマークする。建物には、とにかく入ってみることです（立ち入り禁止でなければ）。どこにも人がいて、どこでも何かが起こっています。次の曲り角があらわれ、知らなかった人や場所に出会える。

あたりまえだけれど、教室にも出かける。授業は未知の世界への入り口です。たくさん知らなかったことが見えてくる。合間に図書館に迷い込む。いっぱい本がある。端末がある。一見そう広くない附属図書館の空間も、書庫やネットに分け入って探索してゆくにつれ、どんどん複雑な迷路が広がってきます。そこにも自分だけの地図を作っていく。その先で思わぬ探し物に出くわさないとはかぎらない。

キャンパスにはいつも人がいる。（こんなに人がいる場所は、正直なところ、この街では珍しい）。どこにどんな人がいるのか、それも授業のあと、線をたどっていけば溜まり場が見えてきます。気になる研究室を突きとめてこわごわのぞけば、先輩がいる。そのうちのだれかはサークルの部屋と線で結ばれているかもしれない。先生だって教室だけにいるわけではありません。あとを付けていく。「オフィスアワー」を狙えば、追い返されずに研究室に入れてもらえるでしょう。すると先生の頭脳の中にも第一級の迷路がある。探索しない手はありません。

【学校じゃない、力の地図】

そうこうしているうちに、大切な場所は濃いしるしがつき、大切な人たちに会える道筋はしだいにくっきり太くなるでしょう。すると、いろいろなプロジェクトが見えてくる。サークルや同好会もプロジェクト。勉強会もプロジェクトです。気のあった仲間と「おもしろプロジェクト」を立ち上げるもよし。（これにはうまくすると予算がつく）。卒業研究は、就職活動と並んで、皆さんの最後で最大のプロジェクトとなるでしょう。ひょっとすると「学長表彰」になるかもしれない。

そうやって線をつなげ、たどっていって、４年のあいだに出来事や人との出会いのたくさんの道筋がついていく。そこはもう「学校」じゃない、皆さんの「できる」すべてが書き込まれてゆく、力の地図です。

【街に出る】

とすれば、大学の敷地だけが「キャンパス」ではありません。アルバイトで、遊びで、買い物で、街に出る。街にも自分の足で地図を作っていくのです。下宿や湯田だけではもったいない。一ノ坂川をたどって山大の古巣、県立美術館や県立図書館などの集まるあたりにも出ていく。古都の山口がある。商店街もしっかり地図に加えてしまう。車もいいけれど、自転車やバスもいい。さらに社会に出てゆくなら「インターンシップ」に志願する。留学という手だってある。大学はいたるところで外と繋がっています。

【自分のキャンパスへ】

昨日までの参考書を捨てよ、地図

作りに出よう。そして強靱な線をいっぱい張りめぐらせる。そこが皆さんひとりひとりの「キャンパス」になる。でも、もし困ってどうしょうもなくなったら…。とにかく学生相談窓口に立ち寄ってみましょう。だれでも困ることはあるのですから。どこにあるか、ですって？さがしてごらんなさい。

E-mail：
ueno@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

オタクのすすめ

西村　順子
教授
教育学部
音楽教育

ご入学おめでとうございます。皆さんのほとんどが、夢と希望に胸を膨らませて山口大学に入ってきたことと思います。しかしやがて来る倦怠と無気力の日々（一般に五月病といわれています）に備えて、今日は老婆心ながらひとつのアドバイスをすることにいたしましょう。この記事をしばらくとっておいて、数ヵ月後に取り出していただければ幸いです。

まず、なぜ倦怠感を覚えるのか。答えは簡単。「大学生活があまりに暇すぎる」からです。高校までのときのように、毎日宿題が出されたり、暗くなるまでクラブ活動に追われたる、あるいは試験に備えて徹夜で丸暗記するなどということは滅多にありません。楽をしたければ、頑張って授業に出席して教授の話を半分ほどノートにとっておけば、多少の居眠りをしたにしてもまあたいていは単位が取れるものです。それに真面目に教授の話を90分の長丁場。しばらくすれば飽きてくること請け合いです。何をする必要があるわけでもなく、朝から夕方まで授業が詰まっているわけでもなく…つまりは何もすることがないのですから、倦怠感に襲われたとしても不思議ではありません。

さて、この五月病にとりつかれる人の多くが、ほとんど将来のことを考えることなく大学受験をしたのではないでしょうか。つまり大学に入学することのみを目標として数年間を過ごしてきたため、入学したとたんに“やる気”を失ってしまったのでしょう。

大学入学試験制度の弊害とも言えますが、なんとも残念なことです。大学での四年間は、人生にとってもっとも大事な時期なのですから。もちろん頭の片隅では、この四年間で何をするかで、これからの人生がまったく違うものになるだろうことはおそらく理解していると思います。では何をすればいいのでしょう。もっとも、それがわかっていれば五月病になるなんてことはありませんけどね。

さて、ここからがアドバイス。倦怠感を克服するには勇気をもって何かに没頭することです。おそらくこれまで一心不乱に何かをするのを怖がっていた人たちが大多数をしめているかと思います。受動的なこと、たとえば一日中音楽を聴く、映画を観る、漫画を読む、友だちとおしゃべりする、ただひたすら寝る…などは経験があるでしょう。しかし能動的なこと、音楽を創る、漫画を描く、友だちを新たに作るなどはほとんどなかったかと思います。怖かったのではないですか。「そんなことをして、いったいどんな意味があるのか、どのように役立つのか、人になんて思われるかしら。」このような不安があるから、これまで能動的に没頭するのを忌避してきたのではないでしょうか。

しかし大学での学問とは、一見意味のないように思われるものに没頭することなのです。ことばを換えて言うと、それまでの勉強とは違ってオリジナリティを要求される能動的活動です。能動的な創造活動とは、オタクかマニアと呼ばれる人たちがするものと考えられています。しかし大学に入学した以上、あなたたちは晴れてその仲間入りをしたのです。極端に言えば、仲間入りをしなければ大学生になったとは言えません。さあ、暇ができたいまこそ、これまでくだらないと軽蔑して踏み込めなかった世界に勇気をもって飛び込んでごらんなさい。そうすれば五月病なんか吹っ飛んでしまうに違いありません。何でもけっこう。興味を感じたものに飛びついてみるのです。身近なところにいくらでも転がっているのですから。そうすれば、やがて取り組まなければならない学問にも違和感なく愛着をもつことができるようになるかも知れません。もちろん、あなたが最初に飛びついたものがたまたま学問であれば、教師冥利に尽きるのですけどね。

コミュニケーション空間としてのキャンパス

マルク・レール
助教授
経済学部
国際経済学科

「キャンパス」 ― まず、この言葉の語源を探って見ましょう。広辞苑では「[campus アメリカ]①（大学などの）校内。敷地。校庭。②（転じて）大学。[－生活]」とかなり具体的な大学との関連付けで定義されています。これはアメリカでの意味ですが、この言葉の由来であるラテン語の辞典を調べれば、campus（カンプス）の本来の意味がもっと広いものであることが分かります。カンプスは「広場」や「平地」を指す言葉ですが、「溜まり場」、「人の集まる場所」と言う意味が含まれています。要するに、キャンパスはもともと何もない広場で、建物のある場所ということではなく、人が集り、初めてその役割を果たせる場所です。そういう意味で大学の敷地も、学生がいれば、初めてキャンパスになります。そして、大学のキャンパスの主な役割はコミュニケーションの場を提供することにあると思います。

私は学生時代のほとんどをドイツの大学で過ごしましたが、通った大学にはキャンパスらしいものがありませんでした。大学のビルが町中に分散したせいで講義間の移動は30分以上かかることも珍しくなかったのです。大学構内での「部活」もなかったので、「キャンパス・ライフ」らしいものは勉強以外、食堂でご飯を食べたり、カフェテリアでコーヒーを飲んだり、ゼミナールの廊下で立ち話をしたりすることに限りました。

その後、私は日本の大学に留学し、山口大学の教官になって、驚いたのはキャンパスの賑わいです。それも昼だけではなく、夕方になるとあらゆる所でサークルのメンバーが集まったり、バンドが練習したりして、キャンパスは人と音に溢れています。大学は勉強の場だけではなく、趣味などの広い意味で、学生の「ライフ・スペース」になっています。キャンパスは練習場、舞台、ジョッギング・コース、散歩道に変わります。いや、変わるのではなく、むしろこれは本来のカンプスでしょう。キャンパスに来れば、大学生活に必要な情報が入手できます。友達に会えます。それも同じ学部だけではなく、他学部の学生との交流も出来ます。サークルの情報、生活の情報、そして就職の情報も得られます。逆の言い方をすれば、キャンパスに来なければ、損をします。こんな賑やかなコミュニケーション空間であるキャンパスが私は大好きです。

しかし、残念なことで、この賑わいは授業期間に限ります。授業がない期間にキャンパスは突然にさびしい場所に変身してしまいます。研究室の前の広場を見れば、ほとんど人影のない日も多いのです。こんな日、キャンパスはカンプスでなくなります。

新入生はこれから授業を履修して、どのサークルに入るかを決め、自分なりのキャンパスの使い方も決まってきます。そしてキャンパスはカンプスになって、「キャンパス・ライフ」が楽しいものになるために自分も貢献しなければなりません。カンプスを作り上げるのは人間だからです。

ちなみに、私の山口大学吉田キャンパスでの一番好きな場所は経済学部前の広場です。春から夏にかけて時々、違った雰囲気でこの広場のテーブルに座って授業をしたり（写真参照）、学生と話したり、本を読んだりして、先生として「キャンパス・ライフ」を楽しんでいます。

ちょっとの勇気

山崎　一慶
人文学部
社会情報論コース３年

新入生の皆さん、ようこそ山大へ！私は四月から四年生になる広島出身の山崎と申します。３年前、広島の実家から平井の下宿へ引越しをして、初めての一人暮しをはじめた日の夜は、とてもさびしい思いをしたのを今でもよく憶えています。あれから３年、いまでは多くの友人、先輩、後輩ができ、山口は第二の故郷、いやむしろ実家の広島よりも居心地のいい場所になっています。

この３年間わたしはサイクリング部という部活に入って全国のいろんな所を、部の仲間達と自転車で旅をしてきました。昨年の夏も、私自身２度目の日本縦断の旅に出、南は鹿児島県の佐多岬から北は北海道の宗谷岬まで多くの思い出を残しながら走破しました。旅の途中には野宿をしている中に雨が降ったり、パンクをしたり、道を聞いても方言で言葉がわからなかったり大変なこともありましたが、見知らぬ土地で見知らぬ人から食べ物や励ましの言葉を頂いたり、見たこともないきれいな風景を見たり、大学生活でしか味わえない貴重な体験をしました。それと同時に「狭い日本」と一般によく言うけれども、様々な町、人、言葉と接することで、「そんなことは全然ない。日本は広いのだ」と心から思いました。

この部に入ってよかったと思うのは単に日本の多くの場所に行けるだけではありません。部の仲間との交流、他大学のサイクリング部との交流、同じ体育会の他サークルとの交流といった多くの人と出会えるチャンスがあるのです。この部に入る以前は、どちらかというと人見知りをするタイプだった私ですが、様々な出会いをしたことで今では初対面の人とも抵抗無く話せる人間になることができました。このことは、私が今やっている就職活動をやって行く上にも大きく役に立っています。

新入生の皆さんは山大で何をされたいですか？明確な答えのできる人はおそらくあまりいないのではないでしょうか。自分自身も大学に入ったころはそうでした。そのような人は何をしようかと迷うのではなく、とりあえずサークルでもバイトでも勉強でも何でもいいですからその世界に飛び込んでみたらどうでしょうか。そしてその世界を真剣に、命がけで取り組み、極めようとするのです。極めれば極めるほど新しい事を知りたくなる、それを知るには多くの人に話しを聞く事になる。そのことで、多くの人と接し、自分が大きく成長して行く。このような過程をたどれば数年後、なんらかの人生の方向性が見えてくるのではないかと思います。一番もったいないのは何をしようかと迷い、結局何もせずに、自分に適当な理由をつけ、今の自分でいいやと思って大学生活を過ごすことだと思います。

大学で学ぶことの意味は、ただ机の上で勉強するだけでは決して無いと思います。部活でも遊びでも恋愛でも何でも本気で取り組む。そこから生じる問題逃げずに、自分のからだでよく考える。その事も忘れては行けない大学で学ぶべき事だと思います。

以上、長々と私の読みにくい文章を読んで頂いてありがとうございます。こんな私の意見を皆さんのこれからの大学生活に生かしていただけるのなら大変光栄です。新しい世界に入り込むきっかけはそこらじゅうに転がっているのですよ。そこに飛び込むのに必要なものは「ちょっとの勇気」、ただそれだけだと思います。

山大生活を２倍楽しむ方法

北田　真平
医学部
医学科２年

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。長い受験勉強お疲れ様でした。いよいよ皆さんは大学生として、新しい生活の第一歩を踏み出されるわけです。そこで、先に山口大学に入学した者として、どのようにすれば充実した学生生活を送れるかをお教えしたいと思います。ここでは、特に医学部に入学された方に向けて書いてみたいと思います。

＜Method Ⅰ＞
なるべくサークル活動に参加する

山口大学は７学部を抱える総合大学ですが、医学部、工学部は宇部にそれぞれキャンパスがあり、実情は医学部、工学部に関しては、単科大学といった観があります。

しかし、一年目は山口市の吉田キャンパスで共通教育を履修しなければならいので、この時だけは、ああ、大きな大学に来たものだ、と実感することができます。

皆さんは、ぜひこの機会に多くの友達を作ってください。というのも、先ほど申し上げた通り、二年目から宇部に行けばそこから先は、同じ医学部の学生しかいません。毎日同じ同級生や先輩と生活するので、医学部内でのコネクションは固くなるのですが、いざ医学部以外の人たちと知り合おうとした時に、なかなかそのようなチャンスは巡ってこないのです（友人談）。

友人を作るには、サークルや部活に入るのが、最も簡単な方法だと思います。一体どれくらいの数のサークルや部活が有るのかは把握していませんが、きっと皆さんの興味のあるものが見つかるはずです（中には宗教まがいのものも有るので要注意です）。医学部にも独自のサークルが有りますが、他学部の学生がいるサークルの方が多くの価値観を見につけることが出来るでしょう。

私事ですが、私は現在アメリカンフットボール部GAMBLERSに所属し、日々充実した生活を送っています。アメフト部は全学のサークルですが、医学部生は私一人だけです。しかし、かなり面白いチームメイト、そして優れた指導者に恵まれ、本当に入って良かったと実感しています。皆さんも医学部という枠にとらわれず、いろんなことにチャレンジしてみてください。きっと、貴重な体験ができると思います。

＜Method Ⅱ＞
講義、実習は積極的に参加する

医学部での生活の中心となるものは、やはり勉学でしょう。専門の講義に入ると、かなりのペースで試験があります。これを乗り切るためには、日々の講義や実習を大切にしなければなりません。医学の領域は日々広がりを見せ、また覚えなければならない事項は莫大な量になります。これを一人でクリアするのはかなり至難の業だと思われます。講義では先生方が、丁寧な解説をしてくれるのできっと理解の手助けとなるでしょう。

また、２年次には肉眼解剖学実習がありますが、これを経験できるのは医学生だけです。また、医学部を卒業してからも人体解剖を行なえる機会はめったにありません。実習中にはいかに人体の構造が合理的に出来ているか、驚かれることだと思います。そして、医学生としての実感が出てくるのもこのあたりからではないでしょうか。

以上、私の経験から学生生活を楽しむにはどうすればよいかについて、お伝えしてきましたが、最も強調して言いたいことは、「何事に対しても積極的に取り組んで欲しい」ということです。受身になればなるほど、学生生活はつまらないものになってしまいます。自分の体で自分の可能性を切り開いてください。

皆様の学生生活が、楽しく充実したものになるよう心からお祈り申し上げます。

大学生活について

福永　英樹
工学部
機械工学科２年

大学はとても自由な環境にあります。頭髪や、服装何でも自由です。しかし、自由だからといって、何でも許されるわけではありません。そこには人としてのモラルや、責任というものが生じてきます。つまりは大人社会で通じる人となるための実践みたいなものです。一般的なこととしては、仕送りや、奨学金で一ヶ月の生活をやりくりする方法を身につけたり、バイトを通して人との接し方や、お金の大事さを学んだりするのです。私は二年間で三つのバイトを経験しました。ショップの店員、出前、ガソリンスタンドと全く種類の異なるものです。新たに仕事を覚えることはかなり大変だけど、こんな風にいろんなバイトを経験することはいい事だと思います。大学の中では絶対に知り合えない人たちとの知り合う場ともなります。是非、皆さんも大学生活の４年間でいろんなバイトを経験して欲しいと思います。

また、大学は高校の時に比べて、日本中のいろんな所から人が集まります。それは、もちろんいろんな考え方を持ってる人たちが集まると言うことです。その中で、‘知り合いをつくり、友人をつくり、親友をつくり、恋人をつくる’そういう人間関係をつくるには最適な場所だと思います。付き合いやすい人たちばかりと付き合うことができるわけではないのですが、そういう状況でも、多くの人たちとの付き合い方などを身に付けることができるのも大学ならではだと思います。だから、「一年生になったらぁ～～～」という歌にもあるように、100人とは言わなくまでも、たくさんの友達を作ってください。おそらく大学での友人たちは、卒業しても長く続く付き合いになるはずだからです。お互いが大事にし合える友人を多く持つことは皆さんの財産になると思います。「困ったときに支えてくれる友人が本当の意味での友人である。」ということわざもあるように、そういう関係を大事にしてください。

次に、大学の講義ははっきり言って、難しいです。特に、工学部は他の学部に比べると相当難しい方だと思います。１年次は、幾つかの必須科目を除けば、いくらでも楽できます。実際に、私は一年次のテストは一年を通してたったの13科目しかなかったのです。けれど、二年次からはそうはいきません。講義のほとんど全部が専門の科目となり、その専門科目はどの科目も必須なので、手を抜くことが出来ません。しかも、三年から四年に上がる時に、関門があるのです。規定以上の単位を取っていなければ、四年に上がれず、留年が決まってしまうという関門です。この関門のために多くの学生が留年すると言う結果になっています。これは学生の学力の低下を防ぐための方法だといえますが、学生がきちんと勉強をしさえすれば、何の心配も要らないのです。大学入学が目標なんて人はいないと思いますけど、そんなことでは就職の時、大変な思いをすると思います。きちんと将来を見据えた自分の道を早く見つけることも大事なことです。
なんだかんだ言っても、要するに遊びに、勉学に、恋愛に一生懸命になって下さい。

大学生活でいい社会勉強を

中東　晋太郎
農学部
生物資源科学科
生物生産科学講座３年

勉学について

新入生の皆さんご入学おめでとうございます。大学というところはこれまでと全く違うスタイルの授業となります。月曜日から金曜日の時間割を自分自身で作るところです。山口大学は文系・理系の幅広い、総合大学です。１年次は共通教育科目が中心で、豊かな科目数がまっています。しかし毎日ビッシリと時間割を組むことはあまりお勧めしません。各学部によりますが、必要単位数をクリアできるよう計画をしっかり立てて時間割を組んで下さい。共通教育案内など配布される資料にはよく目を通した方がいいと思います。また、入学後は部活やサークルなどの勧誘が盛んで茶話会に足を運んでどんどん先輩に尋ねてみることもお勧めします。

また、学内施設として附属図書館があり、広くて多くの蔵書が揃っていてレポートや調べものに大いに役立てることができます。共通教育棟前のメディア棟ではパソコンが利用でき、自分のパソコンを持たない人は大助かりです。他に一人暮らしの人の健康に特にありがたい保健管理センターや安くておいしい２つの学食、体育館や球技場などの体育施設が充実しています。勉強も大切ですが、趣味や特技を磨くのもやはり重要だと思います。山口大学は文武両道が可能な環境を兼ね備えています。

日常生活について

特に一人暮らしの人は生活を送ることがこんなに面倒くさいことかと思い、また親のありがたさを痛感することと思います。洗濯や食事など身の回りのことを自分自身で行わなければならないし、お金のやり繰りもある――学校に行きつつ自分の世話をすることは難しいことです。

ただし、そこには自由な時間があります。平日の一日を半日休みにしたり、放課後は部活動やサークルなどに参加したり、バイトをしたりと生活のサイクル、リズムを自主的に作り上げることができます。僕の場合はまず学校を主体にして残った時間をサークルやバイトに費やしています。サークルやバイトは社会性や協調性を養える絶好の場だと考えています。特にバイトは年齢の違う人達と働いたり、責任を持って行動する大切さなど社会勉強にもなりえます。そしてサークル費や遊ぶお金を稼ぐことができ、社会の体験学習と小遣い稼ぎの両得といえるわけです。

友人づくり

大学に入って新境地に入る人がほとんどで、一人暮らしの不安と同時にほぼゼロから始まる人づき合いもまた不安だと思います。僕は友人づくりには主に２つのタイプがあると思います。１つは学校です。学科などが同じだと講義が同じだったり実習や実験で会う機会も多いと思います。レポートなどの課題や講義でわからないところなどを聞いたり教えたりして助け合うことで友人もできていくでしょう。もう一つは部活やサークルです。趣味や興味などが同じ者同士で活動し、準備、企画、運営管理など自分たちで協力していく場面が多いので、しっかり参加すれば友人づき合いも密になると思います。自分を出していきながら相手のこともよく聞いて色々な仲間を作って楽しんで下さい。

大学周辺は田舎ですが、言うなれば自然が豊かなところです。自由な時間と自然の空間をぜいたくに満喫できることと思います。ただ自転車ではかなかなか行動範囲が広がらないという欠点もあります。せめて原付バイクが欲しいところですね。

最　後　に

大学生というのは半分社会に足を踏み入れたような、まだ甘えも許される場面がある時期かもしれません。しかし、社会に出てからはなかなかそうはいかないと思います。僕自身もそうですが、色々な活動をして、体験し、いい社会人へ向けて「勉強・学習」をしていきましょう。

キャンパスライフのすすめ

仲　　裕子
理学部
自然情報科学科３年

新入生のみなさん、こんにちは。これから新生活を始めるみなさんに、アドバイスをしていくわけですが、まずはわかりやすいように真面目な私の一日を例にとっていきましょう。

～真面目な学生の一日～

授業のある日は７時に起床。休みの日はこの起床時間が大幅にずれることは言うまでもない。パンをほおばりながらＴＶを見て天気予報をチェック。新聞をとっている人はゆっくり新聞を読むのも良し。自転車ラッシュを避けるために早めに家を出る。授業が始まるぎりぎりに家を出ると、自転車の多さにたまげること間違いなし。私の自転車の運転はとっても危険なので、まわりに自転車が多いと必ず自転車接触事故を起こすので要注意。みなさんも気をつけましょう。授業が終わると夕飯の買い物をして帰宅。「今日は何が安いのかしら？？」外食よりもやはり自炊の方が経済的。外食のみで過ごすと、月に５万くらいかかる人も。特に女の子は自炊することをお薦め。何かいいことがあるかも？？無事夕飯を作り終えると、ＴＶを見ながらご飯を胃に流し込む。ここから就寝までは、入浴や勉強など、日によって様々。勉強は１年のうちからちゃんとしておいた方が後々後悔しなくてすむ。みなさん、勉強しとこうね～～。そして睡眠第一の私は12時すぎに就寝。明日も頑張ろう。

…あまりアドバイスになっていませんでした。すいません。では、懲りずにちょっぴり不真面目なX君を例にとってみましょう。

～ちょっぴり不真面目な学生の一日～

朝。昨夜は飲み会で夜遅くまでどんちゃん騒ぎ。二日酔いに睡眠不足が重なり、朝早く起きられるわけもなく、授業始まるぎりぎりに起きて登校。昨日は授業をさぼってしまったので、今日はちゃんと出席しなければ…。あ、朝日が眩しいぜ、こんちきしょう。彼は決意した。今日こそは早く寝てさわやかな朝を迎えてやるっ…。しかし、TVにインターネット、サークル、ゲーム、音楽…数えればきりがないほどやりたいことはてんこ盛り。彼の自制心は働かぬまま、今日も夜が更けてゆく…。

このような生活も自由気ままでいいかもしれませんが、ここはやはり

学生。サークルや趣味に没頭することもいいことですが、授業にはちゃんと出ましょう。夜更かしも程ほどに。ある程度規則的な生活を心掛ければ、心も体もリフレッシュ。

ところで、みなさんは大学の施設についてどれくらい知っていますか？これも私の体験談をふまえて利用方法などを紹介していきましょう。

～保健管理センター～

ここでは、風邪やけがなど、学生・教員の健康に携わる施設です。ちょっとした風邪なら風邪薬を無料で支給してくれます。けがをすれば適切な手当てをしてくれます。私はよく自転車の接触事故等を起こして血まみれ（←大げさ）になり、手当てをしてもらったものです。もちろん、小さな切り傷等でも治療してくれます。また、一般の病院も紹介してくれるので、山口に住んで間もない人でも、迷うことなく症状に合った病院を見つけることができます。

ページの都合上、一つしか紹介できませんでしたが、他にも色々役に立つ施設があります。みなさん自分たちで探してみてくださいね。

さまざまな発見

井手　暁子
人文学部言語文化学科
英米語文化論コース３年

親元を離れて

私は今年で大学四年生になります。入学してから、もう三年も経ってしまいました。こんなに時が経つのが早く感じるのは、やはり大学生活が私にとってとても充実したものであるからでしょう。

大学生になり、改めて痛感したことは、両親のありがたさでした。当然のことながら、一人暮らしをすることになると、生活のすべてを自分で管理しなければなりません。それこそ、炊事洗濯などさまざまです。恥ずかしながら私は、一年の時に食生活が乱れ体調を崩してしまい、元に戻すまでかなり時間がかかってしまいました。そして、高校まで母が作ってくれていたバランスの良い食事のありがたさ、また、大変さなどを本当に実感しました。しかし、一緒に住んでいるとなかなか素直になれなかったものです。周りの友人達もよく言っていましたが、離れることによって優しく、素直に接することができるようになることに気づきました。これは、私にとってとても嬉しいことでした。

社会勉強と出会いの場

アルバイトに勉強に、自分がやろうと思えば何でもできるのが大学生です。しかし、自分から行動しなければ、出会いというのは意外と多くありません。

アルバイトにしても様々な仕事を経験してみるのは良いことでしょう。なぜなら、どんな仕事が自分に向いているのかが、少なからず分かると思うからです。さらに、学生に限らず目上の人など、多くの人に出会える機会が持て、マナーや技術、お金の大切さを学べるからです。現在、私はウェイトレスのアルバイトをしていますが、それを通してサービス業の面白さを知りました。相手からすぐに反応が返ってくるというのは、すごく楽しいものです。そして、アルバイトで貯めたお金で、三年生の夏に海外へ念願のホームステイに行くこともできました。

まずは行動を！

ホームステイはとても短い期間でしたが、いろいろ考えさせられました。私は元々英語が好きで、大学でも英米文学を専攻しているのですが、現地に着くと、自分の語学力のなさ、未熟さに気づき落胆しました。でも本当に、行動すれば何とかなるものです。週末に自分で計画を立て一泊旅行に行ったとき、目的地についてから予約したはずの格安の宿が取れてなく、その日に泊まる所がないというハプニングが起きました。それほどお金も持って行ってなかったので、すごく焦ってしまいました。それでも、とにかく急いで別の宿を探し、なんとか自力で見つけることができました。度胸がついたというべきでしょうか。今思うと、それまでに無いくらいの行動力でした。

大学四年間は、様々な発見ができる場だと私は思います。しかし、それに気がつかなければ意味がありません。一つ一つを大事にしていくことで、自分自身成長できるように思います。

私の一年間

丹野　可南子
医学部保健学科
看護学専攻

勉強について

保健学科の一年次の前、後期を振り返ってみると、前期は総合大学ならではのあらゆる分野の授業が受け

られ、幅広い知識を得ることができました。前期では専門の授業が少ないので、勉強だけに追われることもなく、余裕を持って新しい環境に慣れることができたと思います。後期は前期とは逆で、専門の授業が一気に増えて大変でした。しかし、専門というだけあって、どれも興味をそそるものであり、いやいや勉強するというのではなく楽しく意欲的に勉強に取り組めました。形態学、看護理論、生化学、人間関係論は全て英語の教科書で行われました。外国人の先生が行う授業もあり、その時は全身を耳にして英語を聞き取り、翻訳を頼りに分からない英単語があればすぐに辞書を引く、質問をする、というような感じでした。また山口大学の４年制としての保健学科は新設ということもあり、先生方の学生達に対する期待も大きく、とても熱心にアドバイスしてくださいます。学生達のやる気を最大限にサポートしてくれるので、自分のやりたいことはどんどん前に出していくことができます。

部活・サークルについて

大学は勉強をするところですが、何か一つ勉強のほかにも打ち込めるものを見つけることをお勧めします。私は体育会の部活に入っています。木・日曜以外は練習があり、春、夏休みなどの長期休暇では朝から合宿所に入って練習をし、昼休みをはさんで夕方練習をして夜家に寝に帰るという生活を送っています。毎日忙しいですが、部活に入っていろいろな学部に友達ができたおかげでそれぞれの人の多種多様な意見を聞き、自分の視野が広がったと思います。先輩には人生のアドバイスをいただくこともできたり、もし私が部活に入っていなかったらもっと狭い人間になっていただろうと思います。保健学科は２年からは宇部のキャンパスに移ってしまいます。せっかくの総合大学なので１年のうちに他の学部の友達を作って人間関係を広げてみてください。将来看護婦となって患者さんと接する時、豊かな人間関係の経験がきっと役に立つと思います。部活やサークルに入って友達を作り、それに打ち込むことで大学生活をさらに充実させてみてください。

大学生活について

とにかく大学は自分の時間がたっぷりあります。入学して最初のことは友達とのふれあいも少なく時間がさらにあり余っていました。しかし実際、授業やサークル、部活が始まると全く環境が変わりました。友達と夏はキャンプへ行ったり、冬は鍋パーティーをしたり今まで味わったことのない楽しさでした。大学生活に余裕が出てくると次にとりかかるのがバイト探しです。大学の掲示板を見て、自分でコンタクトをとり、面接を受ける、これは基本です。バイトをすることで得られるのが大学と社会との間のクッションです。私はファーストフード店で週２～３回働いていますが、時間厳守や他人に対する言葉使い、態度を何度となく指導されてきました。最初は厳しいなぁ、やめようかなぁと考えることもありましたが、一年経った今、そのことは私にとって非常に役立つものとなりました。

みなさんはどのような大学を想い絵描いていますか。私が書いたことはたった一年間の体験にすぎません。大学は一人ひとりの過ごし方でいろいろな色を出してくれます。どんなことにもチャレンジをして楽しく、有意義な大学生活を送ってください。

大学を楽しむ為の４要素

濱田　清道
経済学部
国際経済学科２年

新歓フェスティバルとは

大学に入って最初の行事は新歓フェスティバルです。新歓フェスティバルではいろんなサークル、部活の人たちが自分のサークル、部活に入ってもらおうと声をかけてきます。女の子にはナンパな男たちが声をかけてくるかもしれませんが。まず、ここでいろんな所をまわってどのサークル、部活に入るかを決めます。どこにも入らないという選択肢もありますが、私はどこでもいいので入ることをお勧めします。なぜなら友達が出来る最良の方法であると思うからです。その他、先輩たちと知り合えるというのも良い点だと思います。先輩と仲良くなると、いろいろと教えてもらうことができるし、勉強になることもたくさんあるでしょう。良いことやために成ることや悪いことまで教えてくれるはずです。また、素敵な出会いがあるかもしれません。とにかく、山大に入ったのなら新歓フェスティバルで楽しいキャンパスライフの一歩を踏み出しましょう。

サークル＆部活について

サークル、部活では楽しい出来事がたくさんあります。例えば、私の部活(準硬式野球部)ではこんな楽しいことがあります。新歓コンパ、春季リーグの打ち上げ、工学部の顔見せの飲み、秋季リーグの打ち上げ、忘年会に新年会、追い出しコン

パ、って楽しいのは飲みだけかよ！飲み会も楽しいですがちゃんと他にも楽しいことはあるので心配しないで下さい。私が所属している準硬式野球部は体育会の部なので体育会が主催する行事などの参加も楽しいことのひとつであると思います。サッカー大会やバレーボール大会、駅伝大会などの行事があり、いろんな部活の人が参加してくるので他の部活の人と仲良くなることが出来ます。コンパの約束なんかをとったりも出来るかもしれません。このような行事も楽しいですがもちろん野球そのものもすごく楽しいです。私の部にもいますが、他の部にも初心者というのはたくさんいます。ですから、初めてのスポーツにチャレンジするのも良いと思います。また、高校にはないような部活やサークルがたくさんあるので、何か自分に合うものを見つけて下さい。

大学の講義について

次の話はみんなが嫌いな勉強の話です。４月から３年生になる私ですが、私は大学の勉強は高校の時のものとはまったく違うものであると思います。だからといって楽しいわけではありません。むしろ、楽しくないものばかりです。でも、自分の興味のあるものを見つけられるとその授業だけは楽しいでしょう。
楽しくないものばかりですが、だからといって授業を放棄していると留年が待っています。こういうとき頼りになるのが友達です。自分の興味のないつまらない授業は友達と協力して要領よくやれば良いと私は思います。先輩に手を貸してもらうのも良い手段です。逆に自分の興味のあるものは全力で取り組むのが良いでしょう。そうすれば大学での勉強で何かを得て卒業出来ると思います。興味のある授業だけをやれば良いというようなことを言いましたが興味がなくてもやらなくてはならないものがあります。それは、英語とコンピュータです。この二つは嫌でもやっていたほうが将来役立つことが多いと思います。勉強は嫌なものですが、将来後悔することのないよう頑張って下さい。

アルバイト

大学生活でもうひとつ大事な要素といえるのはアルバイトです。アルバイトをすると勉強がおろそかになりがちですが、それでも私はしたほうが良いと思います。いろいろ遊ぶのにもお金がかかるのが現実です。いろんなことにチャレンジするにもお金がかかります。また、近い将来就職活動もしなければなりません。これから先のことも考えてアルバイトはしたほうが良いでしょう。その他にアルバイトは友達をつくるチャンスでもあります。大学内の友達だけでなく一般の人や他の学校の人たちとも仲良くなれます。いろんな人と出会いでいろんな刺激が受けられて楽しいと思います。大学の勉強だけが勉強ではなくこのようなことも大事な社会勉強だと思います。「人との出会いは人を大きく成長させる」と私は思います。

自分らしく生きよう

豊島　史恵
教育学部
学校教育教員養成過程
教科教育コース音楽３年

どんな顔して会えばいいだろう
思い切って声をかけてみた
水溜まりを覗くと懐かしい思い出が
よみがえってくる
一緒に笑い走りまわった
鐘が鳴り響くあの場所で
夜空に星のダイヤモンド
光り輝くどんなにつらくても上を見
ていこうよ　今から
離れていても心は側にある
ありがとう
―（ふるさとの森）―

これは私がＩＹＦＰ（出雲小・山口大フレンドシップ事業）というボランティアで４年生の子供達の為に自分が作った曲の歌詞です。私がこの歌詞の内容のように、前向きな生き方をもち、今の自分になれたのは人との出会いに恵まれたからだと思います。

高校生活まで親の下で送ってきた私は、与えられたものをただこなしていただけという面が強く、大学入学当時は「お客様」になっている自分がいました。言い換えると、常に誰かが言ってくれるのを待つだけでした。しかし、大学は自らの手足を使って情報を収集し、自分で動くことで、自分を高めなければいけません。このことは学問という幹をしっかりもち、そこから人間関係という枝葉がはえ大きく伸びていく木の成長の過程ともいえます。つまり、大学とは、学びの場であり、生活の場である為、自分に何ができるか，どこまでならできるかを頭で考えるだけでなく行動を起こす事が大事なのです。なぜなら、人間関係の視点からも学力を向上できるし、人として大きく成長していけるからです。

過程を宝物にできる生活を

私の場合、自分を大きく成長させてくれる大きな栄養素は沢山の宝物として心の中に残っていますが、その中でも特に２つのことが残っています。

１つ目は、始めに述べたボランティア活動です。上記以外で私が参加したボランティア活動は、ネバー

ランド，田んぼの学校，めだかの学校，アートふる山口，幼稚園の餅つき，きらら博のエコパーク，平川中学校の文化祭の伴奏，などです。私は、人との様々なふれあいの中で、自分がしてあげることより、その時、その場で初めて会った人から前向きな生き方を教えられる事が多かったです。そして、今、その活動は「もの」として残っていないけれど「行為」として自分自身の中に残っています。また、同時に活動を進めるにあたって本当に大事なのは、活動の結果としての賞や評価ではなく取り組みの過程における「自分自身の他人１人１人を大切にする姿勢」や「一生懸命さ」であると知りました。

２つ目は、１年生の春休みに先輩と秋吉台までサイクリングをしたことです。途中、坂がきつくて、諦めそうになった事もありましたが、お互いに励ましあい、先輩の優しさを感じながら、ぽかぽか太陽のもと、桜の満開な自然のなかで「今しかできないこと」を経験し、何かをやり遂げる喜びを知りました。

ありのままの自分で生きる

そして、以上の体験からもわかるように、私を影で支えてくれ、成長させてくれたのは、私が出会ってきた全ての人です。１年の時の私は、「他人から嫌われるのは嫌」「あの時あんなこといわなければ」と後悔する事がほとんどでしたし、人から言われた一言を気にしすぎていました。けれど、そんな自分に「誰でも完璧な人はいないし、つらいのは自分だけではない。つらいといえるならまだ本当のつらさではないんだ。」とプラス思考に切り替える事、自分を見失わない事、自分を好きになる事であると気付かせてくれました。時に、他人の嫌な部分が見えてきたこともあります。しかし、その嫌な部分は自分にもあります。つまり、人は他人との関わりを通して自分自身が見えてくるのです。だから人間関係は大事です。そして、失敗するから成長できるし、自分がうまくいかない事を人のせいにするのではなく、全ては自分の責任となっていることを心に止め、嫌われてもいいというくらいの気持ちを持つほうが人間関係はうまくいきます。なぜなら、自分の人生は自分の心が作っていくからです。

思い切って１歩を踏み出そう

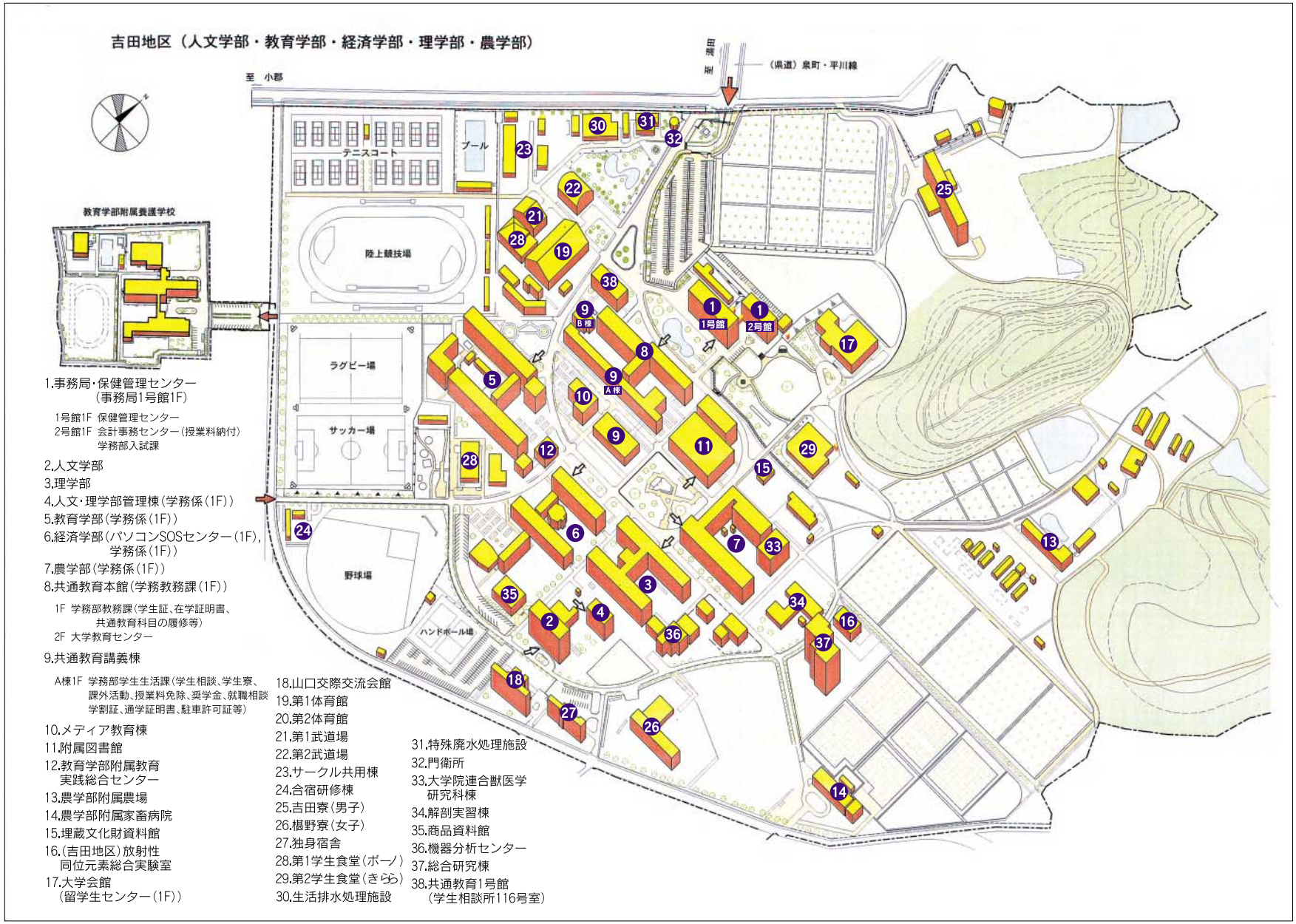
最後に、新入生の皆さん、自分が新しく動き始めるといろんな出会いが待っています。たった１つの出会いが自分の人生を素晴らしい方向に導いていきます。大学生活では、そんなよい出会いが沢山待っています。まずは、心の誘いに乗って、わくわくしながらやりたいことをやってみてはどうでしょうか。物事に偶然はなく、時に、嫌な事、悲しい事、つらい事に出会うかもしれません。しかしそれは、今の自分に必要だからおきています。そして、時間がかかっても、結果として全てはよいことにつながっていきます。人生に無駄な事はありません。誰も悩みをもつことによって、成長できるといえます。だから、人との出会いを大切にし、自分らしい大学生活を送ってください。

山口大学近隣マップ

山口市
YAMAGUCHI CITY
YAMAGUCHI CITY
至小郡
維新百年記念公園
至湯田
至山口
矢原駅
山口線
湯田温泉駅
椹野川
フジグラン
ヤマダ電器
平川出張所
マリン
ジョイフル
ベスト電器
西京高校
平川小学校
平川郵便局
アルク
長門館
平川交番
文栄堂
山口大学

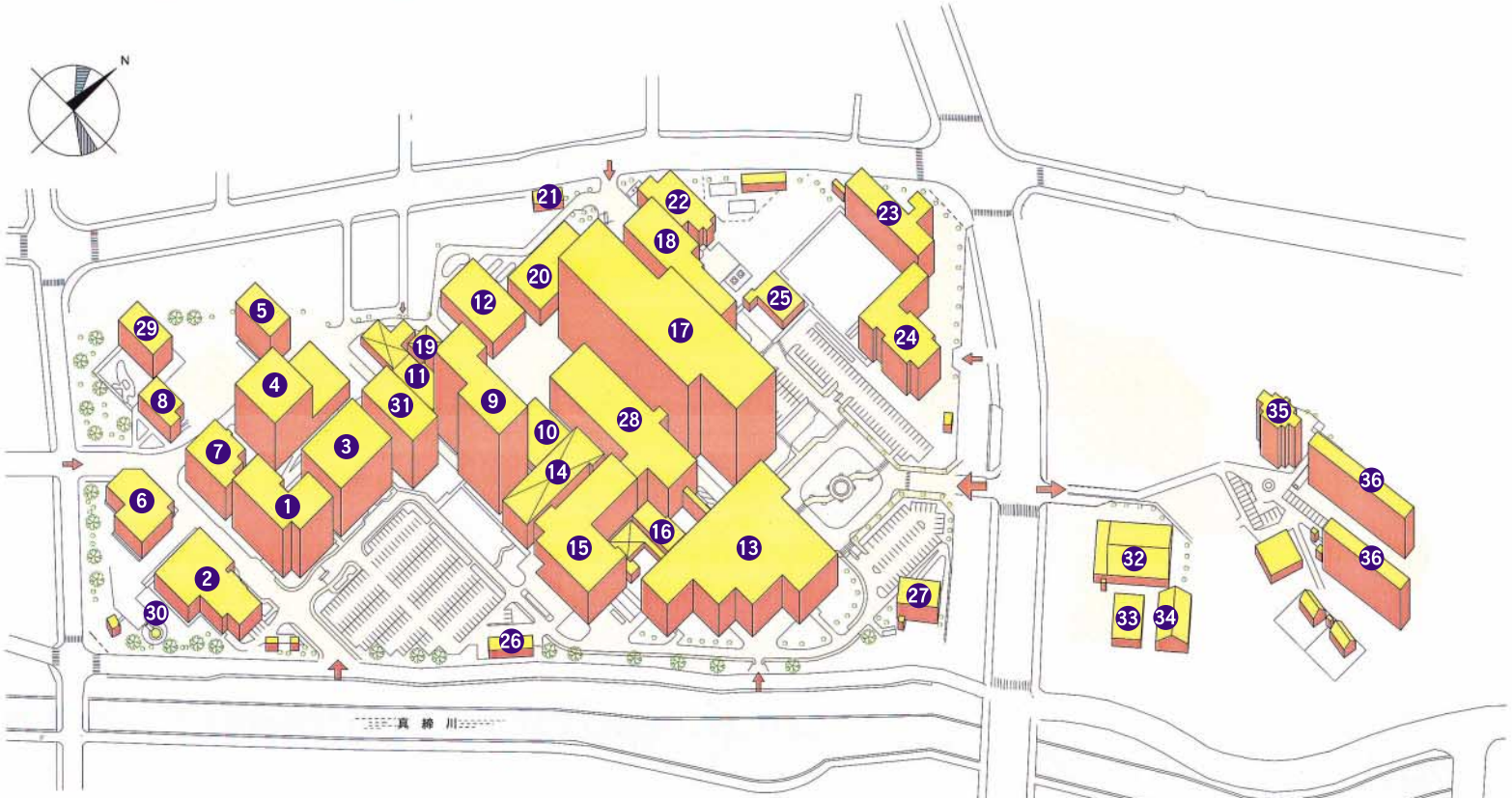
宇部市
UBE CITY
UBE CITY
琴崎八幡宮
宇部高等学校
開
山口大学工学部
上宇部中学校
宇部高専
常盤公園
真締川
Big Mart
カッタの湯
まるき
セブンイレブン
常盤中学校
セブンイレブン
酒のフロンティア
ザ・シューズ
むつみ牧場
セブンイレブン
山口大学医学部
幸太郎本舗
宇部工業高校
宇部女子高等学校
琴芝小学校
宇部中央高校
Books World
神原中学校
まるき
←宇部駅
宇部新川
渡辺翁記念会館
図書館
琴芝駅
神原小学校
ユニクロ
デオデオ
宇部警察署
東新川駅
宇部全日空ホテル
ウエディングパレス愛
←至小野田
宇部市役所
ケンタッキー
宇部興産
恩田小学校
小郡駅→

山口大学キャンパスマップ



山口大学キャンパスマップ

小串地区（医学部・附属病院・医療技術短期大学部）



1. 医学部本館
   1F 学務等（各種証明、就学関係、奨学金
   授業料免除、課外活動、宿所紹介等）
   管理課経理係（授業料納付）
2. 附属図書館
   医学部分館
3. 基礎研究棟
4. 臨床実験施設
5. 中央研究棟
6. 福利厚生施設
   （保健管理センター、食堂、売店等）
7. 実験・実習棟
8. 講義棟
9. 臨床研究棟
10. MRI棟
11. 解剖棟
12. 臨床講義棟
13. 外来診療棟
14. 第一中央診療棟
15. 第二中央診療棟
16. ライナック棟
17. 第一病棟
18. 第二病棟
19. 法医解剖棟
20. エネルギーセンター
21. 剖検材料保存室
22. 特高受変電棟
23. 医療技術短期大学部本館
24. 医療技術短大短期大学部校舎棟
25. 医療技術短期大学部学生ロッカー棟
26. 車庫
27. 焼却場
28. 中央診療棟
29. 医学部記念会館
30. 納骨堂
31. 共同研究棟
32. 体育館
33. 学生部室
34. 学友会館
35. 看護婦宿舎
36. 職員宿舎

山口大学キャンパスマップ

TOPICS

第８回運営諮問会議

第１回運営諮問会議が終わり提言集を発行

■本田　正春　企画・広報室

第８回山口大学運営諮問会議議事録

日　時　平成14年３月５日㈫　13時00分～14時20分
場　所　特別小会議室（事務局２号館２階）
出席者　松野浩二議長，岩田啓靖副議長，河野康志委員，髙本政次郎委員，中澤晶子委員，中島篤巳委員，中東素男委員，福田百合子委員　８名
欠席者　安藤忠雄委員，牛見正彦委員　２名
陪席者　村田副学長，吉村副学長，鎌田事務局長
（事務局）　総務部長，経理部長，学務部長，総務課長，企画・広報室長，企画係長，企画主任，企画係員

議　事

１．第１期山口大学運営諮問会議提言集の編纂について

議長から，このことについて諮られ，事務局から提言集の内容について説明があり、提言集の「はじめに」は議長の言葉とすることとした後、提言集の発行が了承された。なお、提言集は、各委員、文部科学省、学内各部局及び学外関係機関等に配付することとした。

２．運営諮問会議からの提言に対する山口大学の取り組み状況について

このことについて、議長から報告が求められ，村田副学長から３つの提言のそれぞれに関し、現在までに取り組んでいる状況について資料に基づき説明があり、その後取り組み状況等に関する質疑応答が行われた。

３．国立大学の法人化について

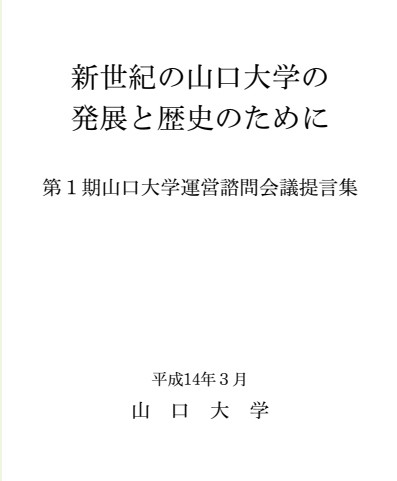
このことについて、議長から現在の状況について説明が求められ、鎌田事務局長から文部科学省において審議されている『新しい「国立大学法人」像について』の主な論点について、資料に基づき説明があった。

４．山口大学の構造改革の方針について

このことについて、議長から説明が求められ、鎌田事務局長から昨年末に評議会で承認された山口大学の方針の主な内容について、資料に基づき説明があった。

５．その他

議長から、本会議が当初予定していた「自主提言」については、文部科学省において審議されている法人化の最終報告を考慮する必要性により次期の運営諮問会議の検討に委ねたい旨の説明があり、了承された。


新世紀の山口大学の
発展と歴史のために

第１期山口大学運営諮問会議提言集

平成14年３月
山　口　大　学

発行予定の提言集（表紙）

TOPICS

シンポジウム

「『法科大学院』構想 —山口大学シンポジウム」について

■山本　光英　教授　法科大学院設置準備会座長　経済学部

今般、国民的課題の一つとして政府の進めるいわゆる「構造改革」の一環である司法制度改革が急速に進められています。その中でも、とりわけ実践的な法曹養成機関としての「法科大学院」構想が全国的に急速に展開しており、国立大学でも25大学が法科大学院設置を希望しているといわれています。

法科大学院とは、理論的教育だけでなく実務的教育も併せて行う、法的プロフェッションを養成する機関であり、将来は（2009年頃と思われる）、原則的に法科大学院の卒業生のみに司法試験（裁判官、検察官、弁護士になるための資格試験）の受験資格が与えられるというものです。大学教員だけでなく弁護士などの実務家も教員となって法曹の養成にあたることになっています。

山口県の法学・政治学教育を担ってきた山口大学においても、法科大学院設置準備会を経済学部の中に設置し、総合大学であることを活かしつつ地域にふさわしい法科大学院の設置を目指して、検討を重ねています。いわば、その「中間報告」として、昨年12月15日、本学大学会館において、山口大学と山口県弁護士会との共催で、山口県庁、山口地方裁判所、山口検察庁、司法書士会をはじめとする士業ネットワーク、および市民の方々のご協力のもと、約200名の参加を得て、標記のシンポジウムを開催しました。

はじめに、永田信明山口県弁護士会会長が「法科大学院の設置に向けた運営に積極的に協力している」と挨拶されたのち、廣中平祐学長が「人間同士の紛争の未然防止や合理的解決にあたる人材の育成は、山口大学にとっても重要な社会的任務の一環。バランスのとれた総合大学への発展に向け努力する」と力強く語られました。その後、藤井俊彦山口県総務部長（山口県知事代理）、小出錞一山口地方裁判長、新庄一郎山口地方検察庁検事正が山口大学に法科大学院の設置が強く期待される旨、次々と挨拶されました。

司法試験委員の河野正憲名古屋大学大学院教授は、基調講演の中で、「山口大学では法学部を持つ他大学とは違った形で多様な法曹人材の育成を試みようとしている。地元山口は明治維新の魁の地であり、社会の変化を先取りした新しいタイプの法科大学院が実現するのでは」と述べられました。「法科大学院のあるべき姿」と題したパネルディスカッションでは、宇部の工学部とも遠隔講義システムを用いて村田秀一副学長、市民を代表して久保田后子

TOPICS

県会議員とパネリストとの間で討論もなされました。その際、「法律家は人間を幅広く勉強する必要がある」、「人への愛が法律家に最も欠かさせない」など法律以外の素養を持つ法律家の育成が必要であるとする意見が目立ちました。また、シンポジウムに参加した本学卒業生からの「社会に出て２年目になるが、法科大学院ができたら、再度チャレンジしてみたい」という意見もありました。

なお、山口大学では、総合大学である本学の強みを生かして、経済、経理、知的財産権、医事法、東アジアなどに強い法曹の養成を考えており、幅広い素養、自分の専門性を活かした法曹の養成を可能にする法科大学院の設置を目指しています。

TOEIC表彰制度

2001年TOEICの成果は!!

■阿座上　真美　助手　経済学部経済法学科

山口大学が全国の国立大学に先駆けてTOEIC・IPテストを1994年12月に導入して７年が経過した。この間33回のIPテストを実施し、総受験者数6117名（内学生受験者数6053名）に及んでいる。

TOEIC（Test Of English for International Communication）は、社会が認める世界共通の英語能力認定試験で、県内では受験が困難であったため、山口大学経済学部に「TOEIC実行委員会」をたちあげ、全学部学生・教職員の受験を容易にした。

1999年から導入されたTOEIC・IP表彰制度（暦年）は、全学部を対象とした「学長特別賞」（歴代トップ賞－過去の最高得点者955点）、「学長賞」（860点以上１名）、経済学部生を対象とした「鳳陽

TOPICS

会（同窓会）理事長賞」(730点以上１名)、「同支部長賞」(730点以上で理事長賞に次ぐ２名）がある。

2001年の受賞者は以下の通り。

「学長特別賞」－該当者なし

「学長賞」－佐藤　由美（人文・３年）

「鳳陽会理事長賞」－藤井　里美（４年）

「同山口支部長賞」－後藤　智美（４年)、
郷原　孝幸（３年)、松岡　さやか（４年）

学長特別賞については、955点を超える者がなかったため今年は表彰が行われていない。

学長賞の授与式は１月30日(水)10時30分から学長応接室で、鳳陽会各賞の授与式は昨年12月25日(火)10時から経済学部長室で行われた。

経済学部では2000年度より、基礎的な学習能力を向上させ、就職活動や就職後の昇進にも有利になるようにとの配慮からTOEICの受験を１年生に義務づけ、西日本の国公立大学で初めてTOEIC・TOEFLの成績に応じて英語科目の単位を認定する単位認定制度を導入した。単位認定は450点から基礎外国語科目「英語」１単位を、以後得点によって、最高では教養外国語科目「教養英語」、専門科目「コミュニケーション英語」の数単位までが得点によって認定される。

導入から２年、今年度は前・後期併せて18名22単位の単位認定の申請があり、特に１年生からの申請が目立った。また、今年度入学の１年生はTOEIC受験を年度内に２回受験することが義務づけられたが、２回以上受験した学生の内約73%の学生が２回目の受験で成績を伸ばしている。

平成14年度からは経済学部だけでなく、全学部の１年生に対してTOEIC受験が義務づけられ、TOEIC300点取得が卒業資格の１つとなる。また、受験を義務づけるだけでなく、TOEIC受験をサポートする授業をカリキュラムに組み込み、学生の英語能力のレベルアップをサポートしていく。

TOEIC・IPテストの照会先：経済学部・阿座上
☎　(083)933-5508

TOPICS

国　際　交　流

外国人留学生見学旅行報告

■原田　和子　総務部　国際主幹付留学生係長

留学生経費実地見学旅費は、大学の指導に基づいて留学生が日本国内を実地に見学旅行する場合及び該当留学生に同行して日本人学生が旅行する場合に、文部科学省から措置されているものです。従来は各学部毎に実施していましたが、来年度の留学生センター設置、事務一元化を視野にいれて、今年度は国際主幹が主体となって企画・実施しました。

経費の都合でバス２台、90人とし、留学生と日本人チューター80人を募集したところ希望者が殺到、結局留学生76人、チューター４人、各学部から、普段留学生の世話をされている教官と事務担当者６人の応援を得て、引率10人の参加者が決まりました。

寒さが厳しくなった12月22日㈯・23日㈰の２日間、２台のバスで出発です。まず、水の豊かな日本の中でも、良水に恵まれた日田市を訪れ、サッポロビール工場と日田天領水工場を見学しました。人のほとんどいないオートメーションの工場もびっくりですが、みんなの目的はやはり試飲だったようで、ビール３、４杯の人が続出しました。

雄大な阿蘇のカルデラを見学しながら内牧温泉の旅館に到着、ここは純和風の温泉旅館で、露天風呂に入って、浴衣と丹前を着て、大部屋で正座して会席料理をいただき、夜は和室に一杯に敷いた布団の上で寝る間があったかどうか。翌朝まずは朝風呂、ご飯にみそ汁、塩鮭、卵焼き、のりに豆腐と純日本料理の朝食を食べて、出発しました。伝統芸能の猿回しをみて、雪をいただく阿蘇中岳に登り、雄大な噴煙に驚きの声が挙がりました。

阿蘇ファームランドで昼食を兼ねて九州地方の産業を見学して帰途につきました。日本の文化と自然を訪ね、体験する見学旅行は、留学生の皆さんにも好評でした。

次に、参加した留学生、日本人学生、引率者の皆さんの声をご紹介します。

○　人文学部　留学生８人・引率：富平美波助教授（留学生専門委員会委員）

○　教育学部　留学生７人・チューター１人・引率：中村幸士郎教授（留学生専門委員会委員）

○　経済学部　留学生27人・チューター２人・引率：河野笙子講師（留学生専門教官）

○　理学部　留学生９人・引率：西本志保事務官（学務係）

○　工学部　留学生５人・引率：池田圭介事務官（留学生担当専門職員）

○　農学部　留学生16人・チューター１人・引率：荒木幸雄事務官（留学生担当専門職員）

○　国際主幹から、石川新次・後藤明利・林　浩之・原田和子の４人が参加しました。

☎　(083)933-5028
E-mail：SH032@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp

TOPICS

自然に感謝の気持ちを　　**人文科学研究科　修士課程１年　王　　上**

日本に来て、今まで東京、大阪、京都、奈良、沖縄など様々なところを旅行してきたが、熊本は初めてである。「阿蘇山」という名前は以前からよく耳にし、今回やっと来ることができた。この旅行を一ヶ月前から楽しみしていた。実は私にとって、日本の「山」も初対面である。雪で覆われている「阿蘇」は、ますますその神秘さを感じさせられたのである。鬱蒼としている樹、きりがない黄色い草原、カルデラから湧いている白い煙は、まさに絵画で見たとおりきれいな絵が描かれている。言葉で表現できないその美しさを、留学生たちの輝いている顔にも描かれている。思い切り叫ぶ人がいれば、カメラでこの忘れられない風景を切り刻む人もいる。寒さにもかかわらず、勉強で疲れたその顔が、笑っている…

日本の民俗学には、「命は海から生まれ、山に去る（死んだ後、山に埋葬する）」という説がある。ちょうど去年の今頃、私は沖縄に行き、海の偉大さを感じ、今回「山」の優しさも感じた。その言葉の意味が少しわかったような気がする。これからも命に対する、自然に対する感謝の気持ちを持って生きていきたい。

教育学部特別聴講学生　プール，ネイサン ライアン

平成13年12月22日にやく二だいのバスいっぱいの外国人留学生と一緒に福岡へ出発しました。最初の目的地は関門海峡でした。そこのきれいな景色を見た後で、もう一回バスに乗って、福岡のほうへ続いて行きました。次はさっぽろビール工場でした。面白い３－Ｄ映画やビール飲みほうだい（無料で！）などはそこのハイライトでした。ほかの自然の水会社へ行って、そして一日目の最後に、旅館に着きました。とてもすばらしい温泉とろてんぶろに入ったり、花火も見たり豪華なごはんを食べたりして、とても楽しい時を過ごしました。

次の日に壮大な火山を見に行きました。すごく寒かったのに、仲間もびっくりして、とてもいい思い出ができました。

この旅行はとてもいい機会で、私もみんなも参加して、とてもよかったと思います。

美しい九州の秋　　**山口大学大学院経済学研究科　修士１回生　Tran Thi Kim Cuc**

札幌ビールの見学はたいへん勉強になった。ビールの生産工程は想像以上にオートメーション化され、工場の中には数えるほどの人員しか働いていなかった。日本の製造工業の生産工程はすべてこのような状態なのだろうか。製造業の雇用が少なくなり、営業部門やサービス産業にしか雇用拡大の余地が無くなっている理由がよく分かった。

阿蘇山は寒かった。秋の終わりともなれば紅葉など美しかろうと期待していたが、阿蘇の見渡す限りの高原には紅葉など無く、ただただ初冬の寒気が肌にしみた。阿蘇が美しいのはきっとつつじの咲く春なのだろうと思う。短い2日間であったが、温泉、火山そして雪を体験でき、留学生の私たちにとってすべての日本を感じることが出来たと思う。本当に有難うございました。

「目で語る国際交流ー阿蘇の旅」　　**経済学部経済法学科３年　大裏　　宙**

日本の新鮮魚介類、中国野菜、隠し味に韓国の唐辛子、そこにベトナムとマレーシアのスパイスドレッシングをかければ、さあお待たせ！見事なアジアンサラダの完成!!

私にとっての今回の二日間は、まるで、このサラダボウルの中で自由奔放にコロコロと動き回る、プチトマトのようなものだったと言えます。ある時は中国人留学生とビール工場で搾りたてのビールを味わい、またある時は韓国人留学生に温泉で水を不意に浴びせられたり、そしてまたある時は日本旅館の正しい過ごし方を教える等、少しはチューターらしく振る舞ってみたりと…。折にふれ、さまざまな国の留学生と接し、多くの刺激を心身共に味わうことのできた非常に印象深い機会となりました。

特に、中国人留学生の劉さんとの旅館でのよもやま話が、最も印象に残っています。彼は、まだ日本に来て日が浅く、日本語が不得手だったため、私との会話は拙い英語によるものでした。しかし、お互いが自分を何とか表現しようと必死でもがいたため、「TVに写っている明石家さんまって何者?」という質問に始まり、中国での仕事の話や子供のこと、そして日本での暮らしぶり等についてじっくり興味深い話をすることが出来ました。目を見て語れば、言葉の壁を越えるんだなということを実感しました。

「感じ取ること」、を満喫できた有意義な旅だった思います。主催して下さった国際主幹の方々に、この場を借りてお礼申し上げます。

TOPICS

人文学部・理学部学務第二係　西本　志保

日本の修学旅行風見学旅行と銘打った今回の旅行は、日本旅館に宿泊するのは初めてという留学生が少なくなく、概ね好評だったように思います。

ただ、普通の修学旅行と違ったのは、最初の行き先がビール工場で、見学の後に試飲の時間が設けられていたことでしょうか。その反面、旅館での夕食は、修学旅行らしく、大広間での会席料理でしたが、お酒がなかったせいか(?)、ご飯のお代わりを申し出る人が続出で、日本料理も十分堪能できたのではないでしょうか。

旅行の目玉は、旅館の温泉と阿蘇山だったと思いますが、予定外の嬉しいおまけとして、旅館から花火を見ることができました。これは、宿泊した町のバルーンフェスティバルの一環だったようですが、澄み切った冬の夜空に広がる花火は、夏の花火とは違った風情があり、旅行の思い出に花を添えたことと思います。

参加した留学生の中には、この３月に卒業(修了)、または帰国する人も多いと思いますが、山口大学あるいは日本での楽しい思い出の一つとして残ってくれれば、留学生担当者として幸いです。

工学部機械工学科２年　モハマド　ファイザル　ビン　オスマン

今回の旅行はとてもおもしろかった。２日間でいろいろなところへ行って、いろいろなことをやって、はじめての体験もやった。なにがというと温泉に入ることだった。ちょっとあついだが、きもちはとてもよかった。日本の旅館に宿泊したのもはじめてであった。今回の旅行はわすれられないでしょう。

外国人留学生実地見学旅行に参加して　　**工学部専門職員　池田　圭介**

12月22日(土)23日(日)にかけて実施された留学生の実地見学旅行に参加した。夢と希望と若さを持った留学生に同行して、いろいろなことを発見した。阿蘇外輪山に積もった雪を見ての歓声、宿舎でテレサテン以上の歌唱力でカラオケを歌ってくれた彼女、次の日震え上がって見ていた吹雪の阿蘇の火口の風景、留学生の皆さんにとってははじめての体験であったろうと思いながら、日本の伝統や文化を理解していただき、若い留学生の皆さんが自分の年齢になる頃には、日本とこのたび参加した留学生の皆さんの国々とが、今以上に親密になっていることを、心の中で祈っていた。

見学旅行報告　　**農学研究科　修士１年　徳原由希子**

今回、参加されていた留学生の方々は国籍も学部もバラバラでしたが、日本の習慣を体験しようという積極性と他文化を受け入れる許容力、それに全てにおいて楽しもうとする気持ちといった共通点があったからこそ、この見学旅行は大変有意義なものになったのだと思います。このような貴重な機会を与えてくださった国際主幹留学生係の方々、並びにスタッフの皆様に心から感謝致します。

総務部国際主幹付国際交流係長　後藤　明利

自分にとってこんなに大勢の留学生の皆さんと旅行するのは初めての経験であった。異国の地で暮らす彼らの探求心の旺盛さ、日本文化に馴染もうとする姿勢は見習うべきものがあり、よい刺激になった。滞在中にいろいろな日本の伝統文化に触れていただくとともに、日本の真の姿を理解し、母国の方達に伝えてもらいたいと願っている。

TOPICS

ASO：A wonderful place to visit

A. S. M. Saifullah
(Ph.D. Student)
Faculty of Science, Yamaguchi University

Creations of God are all wonderful and mysterious. We wonder to see the order and beauty of the nature all over the world. When I was a high school student I wondered to read about the volcano and dreamed to see them on my own eyes. On 22nd December 2001 , I was really excited when our bus started for Kumamoto Prefecture to visit the great ASO. ASO is one of the world's most active volcano, which produced more explosive eruptions than any other volcano in the world. Almost 90 foreign students belong to the different faculties of Yamaguchi University participated in this trip, organized by the university authority. On the way to Kumamoto, we visited the famous Sapporo beer factory at Kyushu. I was impressed to see their environmental-friendly modern technology. We reached ASO Plaza hotel at 5. 30pm and stayed overnight there. After having a good dinner with some exclusive Japanese dishes, we took the opportunity to dip into the ONSEN (hot spring) . Bathing in the ONSEN was indeed a pleasant experience. The accommodation was good enough but I could not sleep well because of my excitement to set my footprints on ASO. Next morning at 9.30am, we left the hotel for our desired destination and on the way to ASO; we enjoyed the traditional SARU-MAWASHI (Monkey dance). While enjoying different acrobatics of the well-trained SARU san, I realized the cultural similarities among the Asian countries. It was around 11.30am our bus reached at the base of ASO. After getting off from the bus I smelled sulfur dioxide (SO_2) in the air that reminded me that I was very near to the volcano. Having green signal from the ASO authority, we decided to reach near to the mouth of the volcano. It was about 900 meter away from us and we took the ropeway car to reach there. While going up by the ropeway, I Looked around and amazed to see the scenic beauties of the mountains, which were all covered by snow. After 5 minutes, we reached at the top of the mountain and walked towards the mouth of the volcano. Huge amount of smokes were coming out from the volcano, told us its active nature. For a while, I could not believe myself that I was standing in front of the world's most active volcano. The weather was so cold but my excitement overcame all the hurdles. The majestic beauty and grandeur of the ASO filled us with a sense of our smallness, humbled our pride and for a time carried us away to a world better and nobler than our day-to-day one. We enjoyed the whole trip and learned a lot. Finally I would like take the opportunity to thank the university authority and to those people who worked hard for this trip.

TOPICS

A Trip To Kumamoto

連合獣医学研究科３年
Tanvir Khatlani

We the foreign students of Yamaguchi University have a privilege, that in addition to other facilities, we are being provided an opportunity to have a visit to some places having a historical or cultural background, by the authorities of Yamaguchi University. It gives an in depth knowledge to those foreign students who apart from their usual studies are also interested in Japanese, history, culture and traditions. These trips are not only educational, but also are entertaining, and they open new horizons for the touring students. Yamaguchi University has organized a few tours in the past a few years to Fukuyama, Fukuoka Aquarium as well as to Toyota factory and other interesting places. All these places had their own importance and proved successful tour spots .

This year an ovenight bus tour was organized for Mount Aso in Kumamoto Prefecture. Although being winter it was not the ripe time to visit there, because of severe cold and snow, yet I think that every one was enthusiastic to pay a visit to the world famous active volcano site, We had been anxiously waiting since long for the day to come, and at last the 22nd December arrived and all of us laden with bags and warm clothes assembled in the university lawns for departure. It was a sunny day and not so cold, and this was a pleasant welcome from nature. The busses start at 8:30 am towards the Engineering faculty (Ube campus) where some other students boarded the bus and we headed towards our destination. On the way we stopped at a few Parking areas and around noon reached to a city in Oita Prefecture known as Hita, which is famous for the Beer Factory, called as the Sapporo Beer Garden. We were shown the fermentation tanks. used for Beer preparation, and on-spot information was provided to us related to the Brewery industy in Japan. Our next stop was a water packing plant. Although people there claim that the water they pack, has some medicinal properties, and cures for some human ailments, yet it is to be confirmed. From here we straightaway drove towards Kumamoto through forests and zigzag roads, and at about 5:00 pm we were passing through Mount Aso. It was already dark and cold outside, so the guide gave us some information about the surroundings, that too inside the bus, and we straightly went to the hotel.

Hotel was a typical "Onsen Hotel" (A Japanese style hotel having a spa and comfortable tatami rooms). Delicious Japanese food including Sushi, Sashimi as well as Tempura and some Kumamoto special cuisine (unfortunately I forgot the Japanese name for them) was served at dinner, soon afier which, we were entertained by Karaoke. Although every one was allowed to sing, but only those students who could sing Japanese songs, participated in it. Some of the students went to see Hanabi (Fireworks). In the night, students relaxed in the Spa and had a nice sleep with sweet dreams. On the next day we started our trip towards Mount Aso, which is the main attraction in that area. On the way we stopped at Saru Mawashi (Monkey theatre), where tamed monkeys were performing a show. It was interesting and all of us enjoyed the show. From here we went Mount Aso, which is thought to have

TOPICS

erupted several thousand years ago, but is still an active volcano, and smoke and dust is still coming out from its crater. It is called a “Cardella” (having a main active volcano in the center encircled by a number of small dormant volcanic mountain peaks). We took a ropeway from the base of the mountain, towards the crater, which depicts the horrible picture of a volcano. The whole scene was scary. Although we were informed to beware of any untoward happenings, but thanks god, nothing unusual happened, and we were watching the greatness of God, which is beyond the control of any human being. Man, who has the pride that he is whole and sole, and who can do anyihing in this universe is really a small helpless creature like other creatures, in front of nature (God) and he is really unable to do any petty thing, and can never compete him (God). In spite of the chilling cold, and slippery surface, Lots of people were there to see the active volcano.. We stayed there for about an hour and came back to the base camp. Because of frequent volcanic eruptions in the past, there are many natural hot springs, and in some places, people put raw eggs in these hot springs, and within no time they get boiled. They are called as "Onsen Tamago". In Mount Aso, there were some vendors selling these Onsen tamago. We enj oyed the hot and delicious eggs there. Around noon we started back and had a halt at Mount Aso Farmland. It is actually a government farm for rearing cattle, yet it provides a good shopping and Omiyage (present) center in that area. There are also many restaurants, especially the Asian Kitchen, where we had our lunch, amid the Japanese stage music. After shopping the Omiyage in the shopping malls, we started our journey back around 3:00 pm in the aftermoon. And we reached University at about 7:30 pm. Although every one was tired, yet it was the best trip, and all of us enjoyed a lot. Thanks lord that it was holiday on the next day, so every one could sleep till late, without any tension of class or the experiment.

It was a great trip and I thank the University authorities for arranging such a trip. Thanks are due for all the teaching and non-teaching staff who accompanied us, and made our trip a successful tour. I would also thank to other people who were related in one way or the other in this tour. Thanks a lot for everything. Good-bye.

私の授業

つまんないことやるほど大学生はヒマじゃない！

鍋山　祥子
講師
経済学部経済学科

1．私が大学生だった頃

学生さんたちに接するとき、私は十数年前の自分に接しているんです。学生の頃、大学の授業がつまらなかった。よくサボりました。（笑）何故、つまらなかったかというと、まずは内容ですね。先生の多くは、「ある事柄についての知識」を話す、それを授業にしているんです。確かに何だか大事そうな話だけど、大学受験に向けて与えられた材料の暗記＝勉強だった学生にとっては、「ふーん、そうなんだ。」でおしまい。ただ難しいばかりで、その事柄がなぜ面白いのか、なぜ大事なのか、何が問題なのか、私と一体どうつながっているのか、というグッとくるものを感じないんです。それから授業の方法。最悪なのが、ただ自分の書いた教科書を読み上げる、というやり方でした。凍った路面に自転車のタイヤをとられながらも、必死でペダルをこいで学校に出てきて、顔と顔をつきあわせてるのに、どうして下向いて「はい、63ページを開いて。」とおっしゃるのでしょうか。だったら暖かい部屋で珈琲でも飲みながら6,000円で購入した先生の書かれた教科書を読んでいればそれでいいのに…。

2．私が伝えたいこと

私が自分の授業で心がけていることはただ一つ。「それって、自分のことなんだ！」と気づいてもらうことです。ある問題について、自分のこととして興味が持てた学生さんは、その時点からもう立派な研究者なんです。「何が面白いのか」を感じてしまえば、後は教員が適切な参考文献や、学界の動向、最新の現状などを紹介しさえすれば、どんどん自分の世界を広げていけます。重たい宝石の原石たちは、「さぁ、どうしてくれるんだ？」という顔をして、今日もドシンと教室の席に座っています。私は、愚痴ともぼやきとも取れる語りの中で、何が問題なのか、どうしてそうなるのか、それはどうなっていくのかを問いかけていきます。「ん？、そうか？、そうだよね、うんうん…。」となったときには既に、原石たちはゆっくりと途を転がり初めているのかもしれません。私はそんな授業中の学生さんの表情が大好きです。授業を一番楽しんでいるのはきっと私だと思います。いつもみんなにエネルギーを貰っていますから。

3．「やりたいこと」が見つかるといいね

何故、研究者がその分野の研究をしているのか、その研究動機を尋ねることはタブーだという人もいます。しかし私は敢えて「研究動機」こそが大切なんだと主張したいんです。人の活動は何事も「やりたい」という動機が重要です。豊かな現代社会、アルバイトを続けていれば食べていける時代です。前近代のように親の職業（家業）に縛られることもほとんどなくなりました。しかしだからこそ、現代の若者は尽きることのない迷いと闘っているんです。「自分は何者か？」「何をやっていけばいいのか？」「自分にふさわしい職業って何だろう？」「運命の人とは巡り会えるのか？」そんな膨大な選択肢の中から、どうしてそれを選ぶのか、という「選択動機」。その動機こそ、現代の若者の「自分らしさ」の砦なんです。大学時代、サークル活動に没頭する者、恋愛によって人間関係を学ぶ者、アルバイトに精を出す者、学問でなくとも自分の手で納得して選び取った事柄に専念できた学生さんは有意義な時間を過ごせたといえるでしょう。しかし、大学教員としては大学において、つまり学問として、それを学生さんに提供できなかったことを恥じるべきだと思います。

大学４年間という自由な時間の中で、損得抜きに自分の感覚で「面白い」と思えるものに出会ってほしい。自分の生活が学問につながっているということに気づいて欲しい。そういう切なる願いを抱きつつ、毎回教壇に立たせてもらっています。

最後になりましたが、そんな私が担当しているのは「地域福祉社会学」「ジェンダー論」などです。教室でみなさんにお会いできるのを楽しみにしています。

☎　(083)933-5569
E-mail：nabeyama@yamaguchi-u.ac.jp
URL：www.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~nabeyama/

私の研究

光環境の安全性と快適性の所要条件に関する研究

田淵　義彦　　教授　工学部感性デザイン工学科

1．感性デザイン工学の概念規定と“創成構想工学”の提案

先行きの不透明な経済状況や、この原因を成しているのではないかと推測される諸方面に亘る組織の硬直化や官僚化などの制度疲労[1)−3)]、あるいはこれらによる社会を覆いつつある閉塞感を打開するためには、工学的システムや機器ならびに環境システムなどと並んで、社会的な制度なども工学的システムとして位置付けて“社会システム”と呼ぶことにして、これを論理的・計量的に取り扱い、総てのシステム分野で新たなサービスや機能を提供するパラダイムの創造が必要と考えます。例えばビジネスモデルは社会システムの範疇に属する代表的なものであり、この創出は既に広範に推進されているように見受けられます。学術においては「新たなる技術立国の構築」を目指した「新しい学術パラダイムの創出」が必要とされ、新しく取り組むべき多くの工学が挙げられ[4)]、さらに既存技術を集積した新しい構想を生み出すことの重要性も指摘されています[5)]。

従来私は、快適性の研究を推進するとともに、これを製品企画に反映させることにより、マーケティングを統合的に実践的に推進する役割の実務に従事していましたが、その間より、新たなサービスや機能の完成想像図を定性的あるいは定量的に示すことによってこれを顕在化させ、システム構成要素の諸分野にブレークスルーの方向性を示すことも含めて、実現システムの開発を促進する機能を有する新たな工学の必要性を強く感じていました。これを“コンセプトエンジニアリング”と呼び、新たなパラダイムの確立を提案して来ました[6) 7)]。本稿からは分かりやすい用語を用いて新たに“創成構想工学（仮称）”と呼ぶことにして、今後広く提案していく所存です。

現在私が所属している“感性デザイン工学科”は、数年前にわが国で初めて本学に創設された学科です。感性工学[8)−10)]は1990年頃から新しくパラダイムの成立した分野で、その理念は「快適な人間環境を創出することを目的として感性を研究すること。」で、「高度化した機能と洗練された美意識の調和と融合。」を目標としています[6) 7)]。感性工学は自から創成構想工学の理念に沿っており、逆に重要かつ有力な側面あるいは手段系の一つとして位置付けられると考えています。したがって、創成構想工学は感性工学の上位目標と位置付けられるので、是非とも本学の博士後期課程に創成構想工学講座もしくは専攻が創設されるよう提案したいと考えています。私は現在、創成構想工学を目標としつつ、先ずは現在の立場で着手できる現実的な課題から取り組んでいます。

2．現在取り組んでいるテーマ

“公共空間の安全性と快適性から見た高品位化（高規格化）”に関する提案を行うことは、大学における工学研究の重要なミッションと考えるので、これを基本方針にして、主として光環境の安全性と快適性から見た視覚所要条件の研究、ならびにこの実現手段系として、システム要素としての照明システム構成学を専攻領域にしています。照明産業の事業規模は年間約１兆円で、あまり巨大産業とはいえないが、この厳しい経済状況において、着実に対前年微増の優良事業です。

大学に対して、光環境の快適性の研究と照明システムの研究による照明産業への貢献が強く期待されており、重要な責務のひとつです。

⑴　現在偶々照明学会で副会長を仰せつかっている

ので、学会活動の活性化と、照明の重要性の認知度向上のため、公共空間の快適化の研究テーマへの重点化のため、公園緑地照明の基礎的条件、ビジュアルディスプレイの視覚所条件を始めとする新規テーマの開拓推進を行っています。

⑵　航空障害灯の視覚所要条件の研究委員会に参加しています。

⑶　上記に続く重要課題は、“防災公園の環境の充実整備”であり、本学内で企画されているプロゼクトに参画しています。照明学会関西支部の専門家による阪神大震災の事後研究および防災照明の提案も大いに採り入れ反映する予定です。

⑷　自動車事故の減少は時代の緊急課題であり、“高速道路走行時の安全性と快適性からみた視覚所要条件”に関して推進中で、かなり重要な成果が得られてきています。

⑸　従来から環境の快適性に関する研究は環境心理学的な手法で推進されてきていましたが、対象に対する主観評価と同時に、快適感に関する生理心理学的測定が長年切望されていました。最近、脳波測定による快適度の測定を始めて、主観評価との間に興味ある成果が得られ始めています。

３．今後の課題

感性工学の立場では、光環境に限定しない広い範囲に亘る環境の快適性、すなわち住み心地、乗り心地、座り心地などの“心地”を研究して計量化し、尺度と目標値を開発し実現技術領域へ提案することが必要であると考えています。さらには、社会の色々な物事（“もの”は物質、“こと”は時空間的な布置と生起序列のフォーミュラすなわち情報と考えられるから)、特に“こと”に関しても広く各種の分野、例えば人文科学などの成果の導入融合を図り、着実に創成構想工学のフレームを確立しながら併せて実態も充実させていき、豊かで楽しい社会システムの創造に提案貢献できるようなアクセスを拓きたいという、夢と希望を抱いています。

(2002.2.12)

参考文献

１）堺屋太一：都会国・日本像、PHP研究所（1994）
２）小室直樹：日本の敗因、講談社（2001）
３）小室直樹：日本人のための経済原論、東洋経済新報社（2001）
４）島尚正編：工学は何をめざすのか、東京大学出版会　（2000）
５）水野博之：デジタル家電で日本が勝つ、東洋経済新報社（2000）
６）田淵義彦：感性デザイン工学と快適性、山口大学工学部紙上公開講座、宇部時報（2000.9.28)、山口大学工学部編：新世紀の工学、pp.170-173　宇部時報社（2001）
７）田淵義彦：感性工学のシステム概念と照明計画学の敷衍、照明学会誌　85-7　pp.502-508
８）文部省学術国際局：平成９年度文部省科学研究費補助金公募要領　pp.26-27（1996）
９）篠原昭・清水義男・坂本博編著：感性工学への招待、森北出版（1996）
10）長沢伸也：感性工学とビジネス、日本感性工学会誌、1-1　pp.37-47　（1999）

私の研究

教育現場の臨床家としての責務

長崎　伸仁　　教授　教育学部　国語教育

国語教育の不易と流行

戦後日本の学校教育は、ほぼ10年に一度改訂される学習指導要領によって学習する内容の目安が示され、法的に拘束されてきました。それゆえ、不易と流行が10年ごとに繰り返されてきたといってもいいでしょう。例えば国語科においては、昭和20年代は、社会科をコアにしたその周辺（道具）教科として位置付けられ、昭和30年代は、学力低下の反省から読解指導が全盛でありました。昭和40年代に入ると、深く読み取ることはできるが、幅広い読書にまでは至っていないという反省から読書指導が奨励されました。

その後、昭和50年代には理解と表現の関連指導が、昭和60年代から平成に入ってからは、文字言語より音声言語教育が重視されるようになりました。そして、平成10年度の学習指導要領の改訂では、学習者のコミュニケーション能力を重視する「伝え合う力」がキーワードになっています。

国語教育の現状

不易と流行という観点から現在の国語教育を照射すれば、不易は「基礎・基本」となり、流行は「伝え合う力」といえるでしょう。この「伝え合う力」というのは、話し言葉による力だけではなく、書き言葉による力も求められることになりますが、現在の子どもたちのコミュニケーション能力の現状や新たに教育課程に位置付けられることになった「総合的な学習の時間」の教育内容を反映して、話し言葉に傾斜がかかった「伝え合う力」の実践や研究が模索されているようであります。私の研究室で卒論や修論（現職教員が中心）を書く学生も例外ではありません。

「私の研究」と「流行」とのマッチング

教科教育を専門とする研究者は、優秀な臨床家でなければならないと考えています。自分の研究に閉じこもるのではなく、学校現場に絶えず出かけ、子どもと接し教員と接する中で、現状を的確に把握しながら自分の研究に生かしていくことが大切だと考えているのです。

ところで、私の研究の主たる分野は、国語教育の「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」という三領域でいえば、文学的文章や説明的文章を「読むこと」に属します。

しかし、時代の流れは、前述のように「伝え合う力」に向かっています。特に、先の教育課程審議会答申で、これまでの詳細な読解に対して異義が唱えられた文学的文章教材や説明的文章教材をどのように扱えばいいのか、まして、その学習が子どもたちのコミュニケーション能力や「伝え合う力」にいかに連動させるかとなると、現場の教育に携わる教員にとっては深刻な問題でありましょう。

説明的文章の学習でいえば例えば、従来、小・中・高等学校を問わず繰り返されてきたのが、文章の要点をとらえたり文章を要約するばかりの学習です。筆者の論理展開に不整合があろうと、筆者の主張や判断に納得していなかろうとも、強いられてきたのが、要点をまとめたり、〇〇字以内に要旨をまとめ、要約をする、といった学習ばかりでした。私の言葉でいえば、こういった学習は「教材の枠に拘束された読み」といえます。筆者の論理展開や主張や判断に対して、自分はこう思う、自分ならこうする、といった類いの「自分」を打ち出すことのでき

る「教材を突き抜ける読み」をすることこそが、「今」求められているのではないでしょうか。つまり、国語科を「理解教科」とするのではなく、「表現教科」と位置付けることで、私の中では、「私の研究」と「流行」とのマッチングばかりではなく、不易と流行とのマッチングが成立するものと考えています。

私の研究は教育現場の現状を抜きには考えられません。今後も、学校現場に足繁く通う臨床家としてその責務をまっとうしていきたいと考えています。

☎ (083)933-5316
E-mail：nobu@edu.yamaguchi-u.ac.jp

読者の声

第52回 中国五大学学生競技大会を終えて

山藤　早苗　　学生実行委員長
人文学部人文社会学科４年

通称「五大」と呼ばれるこの大会は、中国地方・国立五大学の体育会系の部(山口大学の全ての部が参加するとは限らない)が、各々の大学の名を背負って競技する大会である。９月に夏季大会(水泳バレー、テニスなど)、11月に冬季大会(サッカー、ラグビー、柔道など〉と二回行われる。昨年、半世紀を越えて52回目を迎えたこの大会が山口大学で行われた。主管が巡ってくるのは５年に一度。ひょっとしたら在学中に主管という「大役」に巡りあえない人だっているかもしれないのである。そのような大会の実行委員長に任命された私は、非常にやりがいのある仕事だと胸を躍らせた。

学生実行委員は各部の代表者一名を選出、計22名から成り立つ。その中で係分けをし、必要だと思われる仕事を分担して行った。今回主に行った仕事は以下のようなものである。

① 山口大学の体育会各部に競技の応援依頼
② 維新公園メインアリーナで行われる全体開会式の準備・運営
③ 大会ポスター、バッチ作成
④ 五大新聞作成(出場する部の紹介、大会への意気込み等掲載。夏季前冬季前の二回)

実行委員を運営するにあたり、顧問の先生方から「せっかく運営するのであれば、何か今までとは違ったことを企画してみては」とのお言葉を頂いた。それが「①応援依頼」である。各部の希望を聞き応援先を振り分け、大会当日に応援に来てもらうという企画である。競技によっては非常に盛り上がり、後日選手も試合に集中することが出来たとの声もあがった。この他にも実行委員は山口大学学生生活課の職員の方々と二人三脚で協力し、各部の競技運営を統括することを主に物品の準備等、職員の方々と綿密な打ち合わせを行った。

しかし前述したように「胸を躍らせた」のは少しの間だけで、今だから声を大にして言えることだが、正直このような大規模な大会を運営することは不安で一杯であった。失敗してしまったら「山口大学全体」として悪評が立ってしまうのである(少々大袈裟かもしれないが)。それだけは避けたかった。５年前の前大会資料を基に運営しようとするが難航し、情けない話だが私の頭の中で明確なヴィジョンが浮かび上がってこないのである。実行委員長の私がこのような具合であるから、他の実行委員はそれ以上に理解出来ないことが多いのは当然である。迷

筆　者

い悩むこともしばしばあったが、周囲の協力、そして励ましを得ながら何とか無事やり遂げることが出来た。

今大会の山口大学の総合成績は二位。一位の広島大学に及ばずとも夏季大会・冬季大会共に二位という、近年希に見る快挙を成し遂げた。その中でも初優勝を飾った男子水泳部と初参加にして初優勝を掴んだ軟式野球部をはじめ、硬式野球部、バドミントン部、硬式庭球部、サッカー部の優勝、その他の部も上位入賞が多く、少なくとも応援の効果もあったと思い、ひと安心であった。

最後にII中学長先生をはじめ、大学職員の方々、宣伝に協力して頂いた特約店の方々、体育会の皆さん、そして多大な迷惑を掛けた実行委員の皆…本当に有難うございました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

次期大会は岡山で開催されます。更なる向上に期待しています。

チョットいい話し

「大分県中津市の男性の方からの電話」

２月10日（日）、国道９号線の文殊付近（木戸山トンネルの長門峡より）で、スリップ事故を起こし２～３名が負傷した際に、救急車の手配、警察が来るまでの１時間30分の間付き添ってもらった。山大の学生さんに大変感謝していることを伝えてほしい旨の連絡があった。山大の学生は、津和野方面からの帰りで、車２台に分乗、女子学生もいた。

（文責・学生生活課・楠元）

教官著作書の紹介

時間と時――今日を豊かにするために　（学会出版センター）

山口大学には時間学研究所がある。その設立のきっかけになったのは1999年10月に行われた林原フォーラム「時間と時」の成功であった。出席者を75人に制限した会議であったので、その詳しい内容を公開することが多くの人から望まれていた。会議から２年を経て、ようやくこのフォーラムの内容を伝える本が出版された。全体は４つの章に分かれており、第１章：時間学への夢、第２章：老化と死、第３章：時間の定義を求めて、第４章：豊かな時を過ごすために、と題されている。この中で25人の当代の代表的な研究者が自分の専門研究から「時間」というものに対する見解を述べあっている。その分野の広がりは従来の学問領域から考えると驚くほど広い。たとえば、宗教学の脇本平也と生化学の今堀和友、西洋史の阿部謹也といった人たちが違った立場で同じ「死」について述べている。物理学の佐藤文隆と経済学の中村達也が「時間」と時代について考察を繰り広げている。この例に示された文理融合あるいは文理協調こそ時間学研究所の一つの理想となっている。寄稿された論文はフォーラムが開催された後に、そのときの多くの質問や議論、ほかの講演から学んだことを取り入れて、著者が改めて書き下ろしたもので、対話がとても成立しそうもない分野の人たちが一堂に会した林原フォーラムの雰囲気を伝えていると同時に、この会議の成果を反映している。ただし、残念ながら、フォーラムで交わされた議論の記録は収録されていない。山口大学からは廣中学長が巻頭言を寄せ、時間学研究所の設立に参加した井上愼一、山本和之、富岡憲治、入不二基義、千葉喜彦の５人が寄稿している。この出版によって、時間学研究所の理念がより多くの人に理解され、山口大学の発展に寄与するように願っている。

廣中平祐、井上愼一、金子　務 編

※尚、時間学研究所にて、希望者には２割引でおわけいたします。

「著作書の紹介」を公募します。お問い合せは巻末担当係までお願いします。

新聞掲載された山大・地域から見た山大

１月

○教養アップへ“駅ビル留学”　－徳山－
　山口大など５教育機関　英語や哲学公開講座
（中国：12月31日）
○きらら博の快挙忘れない　－山口大学長廣中平祐－
（山口：１日）
○人往来　山口大学と地域もっとかかわりを
　人文学部３年松浦　健さん　（山口：４日）
○山大に宇宙物理学コース
　－国立天文台とスクラム４月新設へ－
　電波望遠鏡に改造し共同研究
　（山口：４日、中国：14日、朝日・毎日・防長：17日、日経：19日、西日本：19日）
○農家の経理支援します
　就職口自分でつくった　増田　美幸さん
（朝日：１日）
○産学官連携し新事業　－来月「中国地域サミット」－
　山大学長ら300人　（中国：５日）
○山大卒業条件に
　ＴＯＥＩＣ300点以上　来年度から実施　（山口：７日）
○講演会　宇宙の神秘をさぐる
　17日に山口大学大学会館で　（サンデー山口：11日）
○山口大生、農作業手伝い
　請負組織設立　報酬は農作物
　（日経：17日、山口：18日、毎日：24日、西日本：28日・山口：29日、中国：２月３日）
○国立天文台の藤沢助手が講演　－山大－　（山口：18日）
○知りたいやまぐち
　－山口大学人文学部教授 湯川 洋司氏－
　民族①（朝日：18日）　民俗③（朝日：２月８日）
○学生など５人事業構想説明　－やまぐち産業振興財団－
○山大背負いラストラン
　４度目の１区「記録更新だ」主将・兼重選手
（中国：24日）
○山口大の改革案　大学院は学部横断型に
　理、農学部の再編も検討　（朝日・毎日：25日）
○28国立大が統合合意　－文科省調査－
　設置形態県境超え生き残りへ効率化
　山口大は地区協議会で検討　（山口：25日）
○後任に鈴木教授　－山大大学院連合獣医学研究科長
（朝日：26日・山口：28日）
○今この人　－月曜インタビュー－
　学生耕作隊を結成した山大生　近藤紀子さん
（西日本：28日）
○国公立大２次試験願書受け付け開始
（山口・中国：29日）
○新学長選出へ推薦投票実施　－山口大－
（中国・朝日：30日）
○農業の現場興味深い　農業大学校と山大農学部
　人材育成へ研修会　（山口：31日・毎日２月１日）
○政策投資銀 大学中心に産業創出を
　下関・宇部・徳山挙げ提言　（日経：31日）
○新しい県内道路整備
　道路墾座長に山大副学長　（山口：31日）

２月

○ご利用どうぞ学生卒業研究　－山大工学部など－
　企業からテーマ募集　（山口：１日、中国：18日）
○山口大教育学部卒業・修了制作展
（西日本：１日、山口：15日）
○山口大、３センター新設
　留学生/大学教育/メディア基盤　新年度特色づくり推進
（中国：２日）
○男女参画社会づくり研修会　７日、山大３会場で
（山口：３日、山口：８日）
○山大工、理学部『現場の課題』待ってます
　地場企業対象卒論テーマ募集
（日経：２日、西日本：３日、毎日：７日）
○大学外でも評価得たい「山口大学文化会文芸部」
（山口：２日）
○経済学部長に瀧口教授選出　－山口大－
（朝日・中国：７日、山口：８日）
○山大は平均倍率4.9倍　－２次出願－
　県立大７倍下関市立は12.3倍　（朝日：７日）
○県境越え学科再編浮上　－山口大と鳥取大－
　獣医学科と農学部対象　（西日本・中国：７日）
○ボランティアの力 山大フォーラムを前に
　地域を変える原動力に　（読売：９日）
○美術教員の卵卒業展
　あすから山口大院生ら　（中国：13日、山口：15日）
○山口学園都市めざし「町会議」３大学連携山口に拠点を
　山口大・県立大・芸術短大
（中国・山口：15日、防長：17日）
○山口大で来月３日、フォーラム
　環境保全型農業考える　（朝日：18日）
○学長選５人の争い　山口大28日に１次投票
（中国・朝日・毎日・山口：19日）
○山口大の将来熱く議論
　学長広報５人本部で交流会 教員からも質問
（中国・読売・山口・毎日：21日、朝日24日）
○山大工学部の留学生５人招く　－上宇部同推協－
　国際交流深める　（宇部：20日）
○研究成果活用して　－山大や高専－
　小郡で来月中小企業向け発表会　（山口：23日）
○医療機器研究施設　今秋着工へ３億円計上
（山口・読売：23日）
○山大教育学部教授が講演
　下関・豊浦教育ネットが例会　（山口：25日）
○国公立大二次試験　３大学で5412人挑む
（読売：26日）

原稿をお寄せ下さい

広報誌は、学内だけでなく、山口県内の高校以上の教育機関、地方自治体及び主として、中国・四国地区の企業等学外の約500の機関に配布します。

ア．Ｑ＆Ａ欄について

山口大学についての質問をお寄せください。質問は、お名前、所属、職（学生の場合は学年）、年齢を付して文書でお願いします。Ｑ＆Ａ欄に採用させていただくときは、字数などの関係で文章を一部修正させていただくことがありますのでご了承ください。学外からの質問を歓迎します。

イ．催し物について

公開講座、学会、研究会等の開催計画がありましたら、日時、場所、名称、責任者氏名、所属、電話番号などをお知らせください。

ウ．「私の授業」「私の研究」「国際交流」「山口大学の将来についての提言」など

「私の授業」「私の研究」では、日頃おやりになっていることを、高校生にもわかるように、やさしく述べていただければと存じます。また、昨今、大学の将来についての関心が高くなっています。そこで、山口大学の将来のあるべき姿について、学内外から原稿をいただければ幸いです。建設的なご意見を期待します。

【執筆要領】

上記ウについて、執筆要領は次のとおりです。

１．原稿（図、表を含む。）は40字×40行で、できるだけワープロでお願いします。第１行は題名、２行目は氏名、所属部局名、研究室あるいは講座名、職、本文は４行目から始めてください。本文は３～４に区分し、小見出しをつけてください。

読者が連絡や質問をされる場合に便利かと思いますので、お差し支えなければ、原稿の末尾に研究室などの電話番号を括弧書きにしてください。

原稿は次の枠内のような形になります。

ワープロを用いない場合は、400字詰原稿用紙４枚以内で、ワープロの場合の要領に準じてお願いします。

ワープロで原稿を作成された場合、お差し支えなければ原稿と一緒にフロッピーをお貸しいただければ幸甚に存じます。

第１行　題名
第２行　氏名、所属部局名、研究室名、職
第３行　（空白）
第４行　本文始まり
・
・
第40行　本文終わり
（ＴＥＬ＿＿＿＿＿＿）

２．ご自分が写っている写真を一枚と本文に関連する写真も添付してください。研究や授業の場面の写真を歓迎します。

原稿には締切期限を設けません。適宜、下記までお送りください。そのほか、種々の問い合わせも下記まで。また、原稿はE-mailで送っていただいても結構です。

〒753-8511
山口市吉田1677-１
山口大学総務部企画・広報室
広報・調査係長　有吉義和
☎083-933-5007　　ＦＡＸ083-933-5013
E-mail：yuinfo@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

編集後記

「一年生の皆さん、この冊子を持ってキャンパスを歩きましょう。」

これが今回のYUインフォメーション60号のねらいです。巨大な組織体であり空間である山口大学で、新入生が、まず第一歩を歩み出すための地図になればとの企画・内容です。

大学の変革は現実の動きとなり、それに合わせて学部単位ではなく大学全体での方向づけや判断が必要になりつつあります。そこでは広報誌そして広報そのものの役割も改めて問われています。

誰に、何を、どのように伝えるかを、情報化の中で改めて考えなくてはなりません。さて、今回の号にその動きは見えるでしょうか。

（坪郷）

◎山口大学ホームページ http ://www.yamaguchi-u.ac.jp/index_ j.html

山口大学広報第六十号
平成十四年三月二十一日発行
編集発行　山口大学広報委員会
（総務部企画・広報室）
住　所：山口市大字吉田一六七七―一
電　話：（０８３）９３３―５００７
ＦＡＸ：（０８３）９３３―５０１３
E-mail：yuinfo@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp
印　刷：児玉印刷株式会社

広報活動専門委員会委員
小谷　典子（委員長　人文学部）
坪郷　英彦（人文学部）
福田　隆眞（教育学部）
マルク・レール（経済学部）
小宮　克弘（理学部）
東　玲子（医学部）
森田　昌行（工学部）
宇佐見晃一（農学部）
善甫　宣哉（附属病院）

専門委員
堀江　穆（アドミッションセンター）
熊谷　武洋（教育学部）
小林　邦和（工学部）